

彦根市の位置

（2）地形・地質

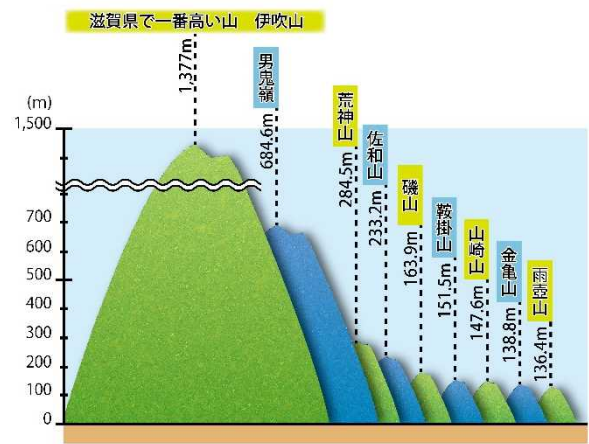
本市は、琵琶湖の東岸の湖東平野に位置し、一級河川の^{せりがわ}芹川、^{いぬかみがわ}犬上川、^{うそがわ}宇曾川、^{えちがわ}愛知川が流れ、肥沃な穀倉地帯を形成しながら琵琶湖に注いでいる。平野部には、^{さわやま}佐和山、^{あまつぼやま}雨壺山、^{こうじんやま}荒神山、^{やまざきやま}山崎山、^{こんきやま}金亀山などの独立丘陵が存在し、自然豊かな本市の環境を形成している。

そのうち彦根城のある彦根山（金亀山）は、標高約 138.8m、平地からの比高約 50mを測る独立丘陵である。また、地質は、^{ちちぶこせいそう}秩父古生層に含まれ、^{けつがん}粘板岩・^{けつがん}砂岩・^{ぎょうかいがん}頁岩・^{ぎょうかいがん}チャート・^{ぎょうかいがん}凝灰岩などの岩石から成り立っているが、彦根山は主としてチャートで構成されている。

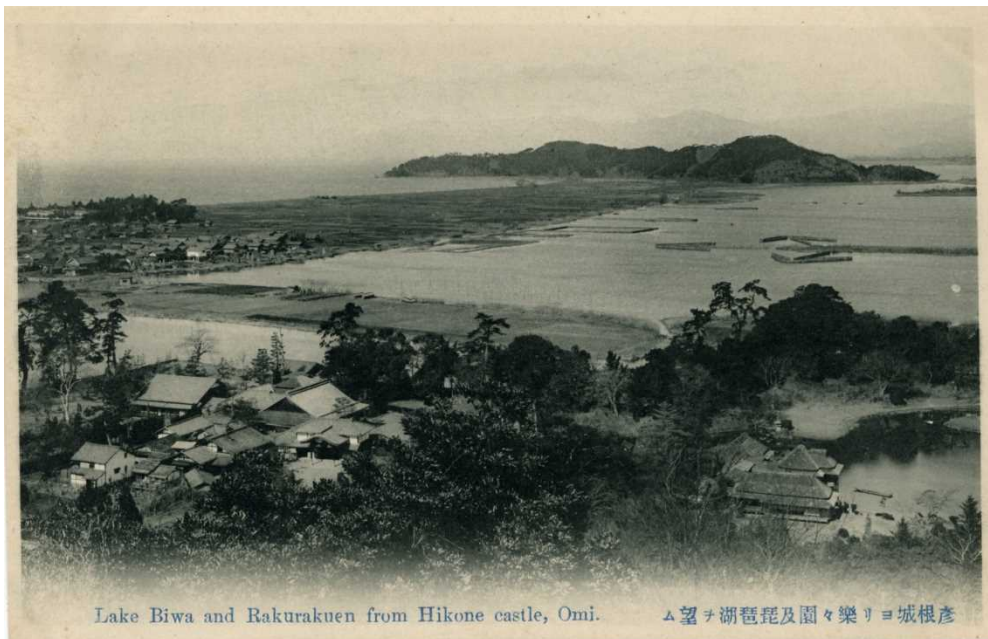
かつて松原内湖に向かって流れていた芹川は、いくつかの支流をもち、^{えいろく}流路は永祿年間と^{けいちょう}慶長5年（1600年）とで異なっていることから、芹川の流路が頻繁に変化したことが伺え、彦根城の築城および城下建設の際に付替えられたと考えられている。他の河川も洪水を繰り返しつつ、時に河道を変えるなどして平野を形成していった。

池沼では、彦根城の北側にあった^{まつばらないこ}松原内湖は干拓されたものの、現在でも^{そねぬま}曾根沼・^{のだぬま}野田沼などが存在している。これらの河川・池沼の水辺は、多様な生物の生息の場として、住民の暮らしに多くの恵みをもたらしてきた。

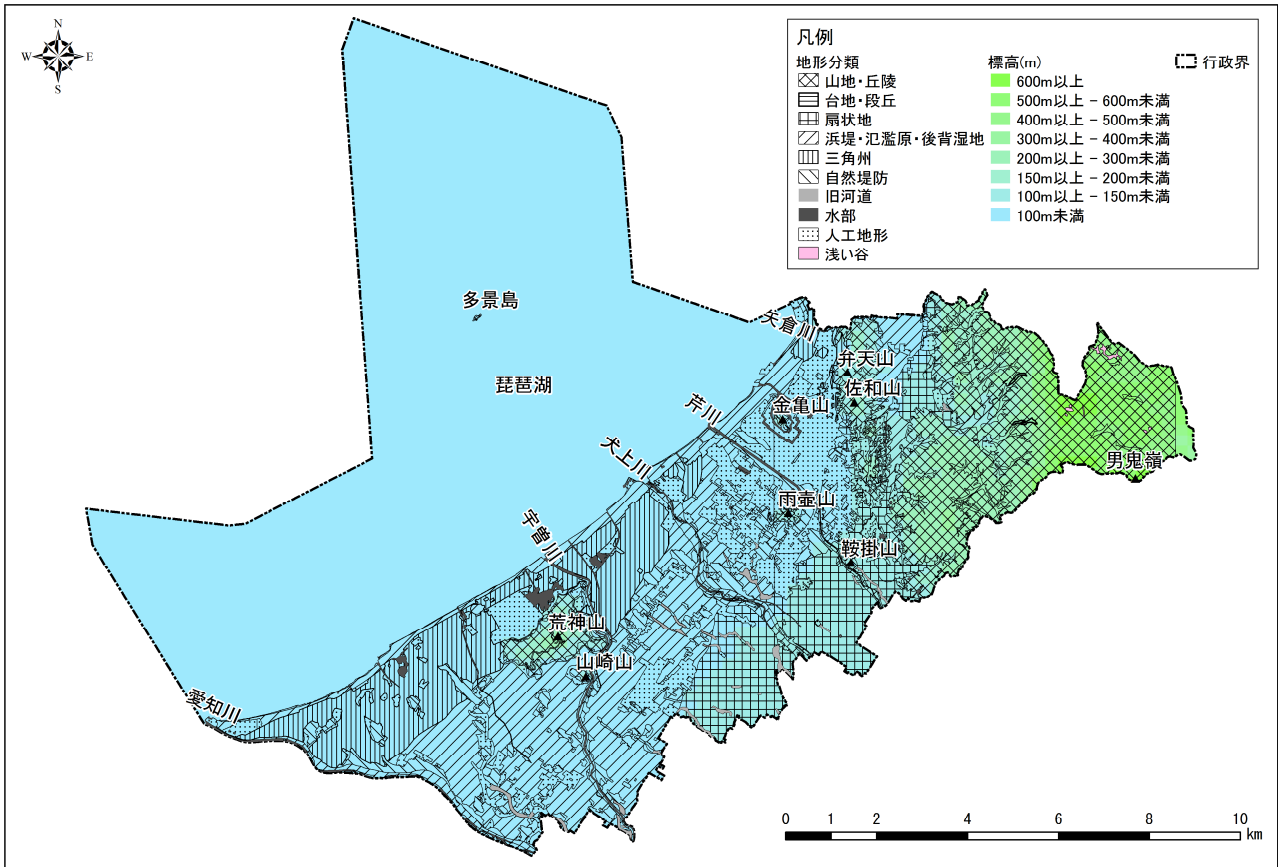
彦根市の高度	
最低	83.3m
最高	684.6m（男鬼嶺）
荒神山	284.5m
佐和山	233.2m
彦根山（金亀山）	138.8m



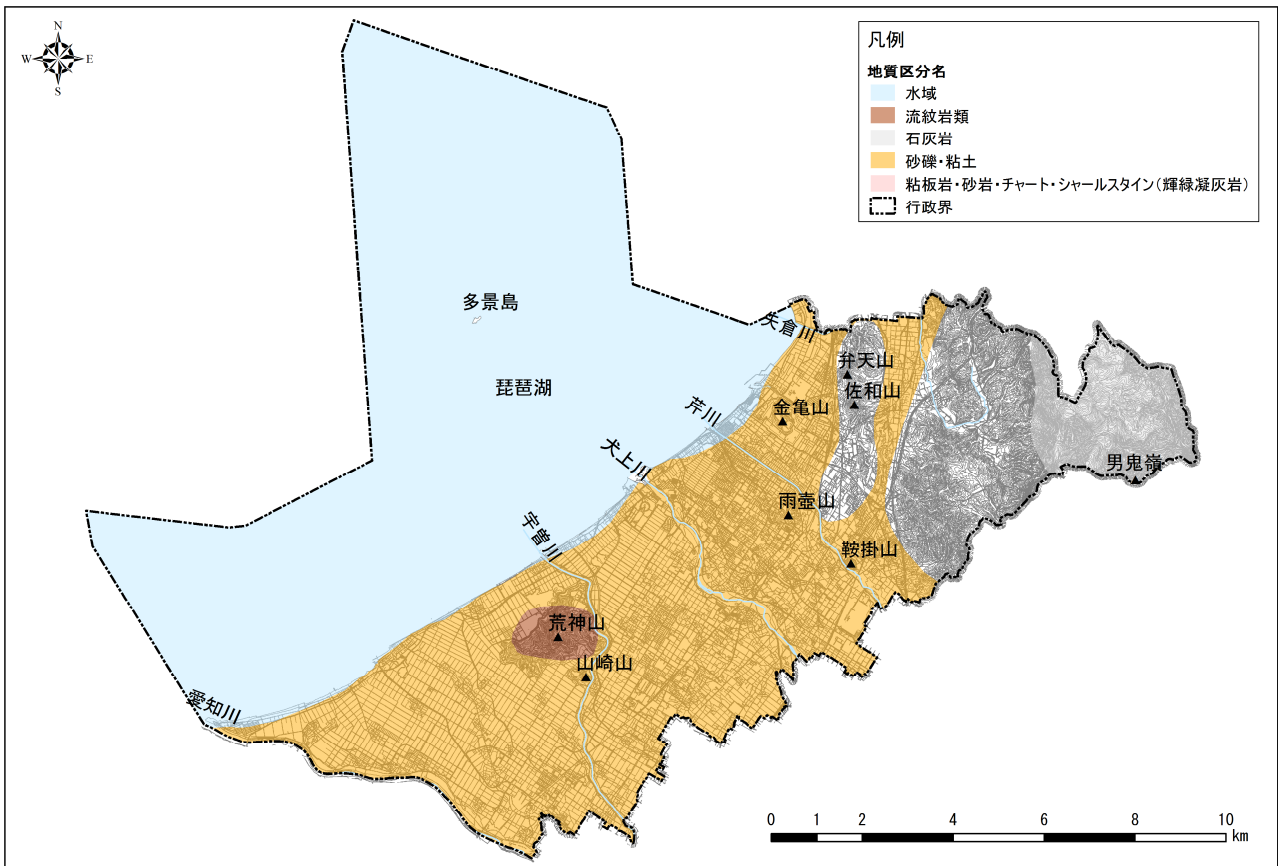
彦根市内の山の高さ



松原内湖遠望（明治42年以前に撮影）（資料：新修彦根市史第10巻）



彦根市付近の地形図



彦根市地質図

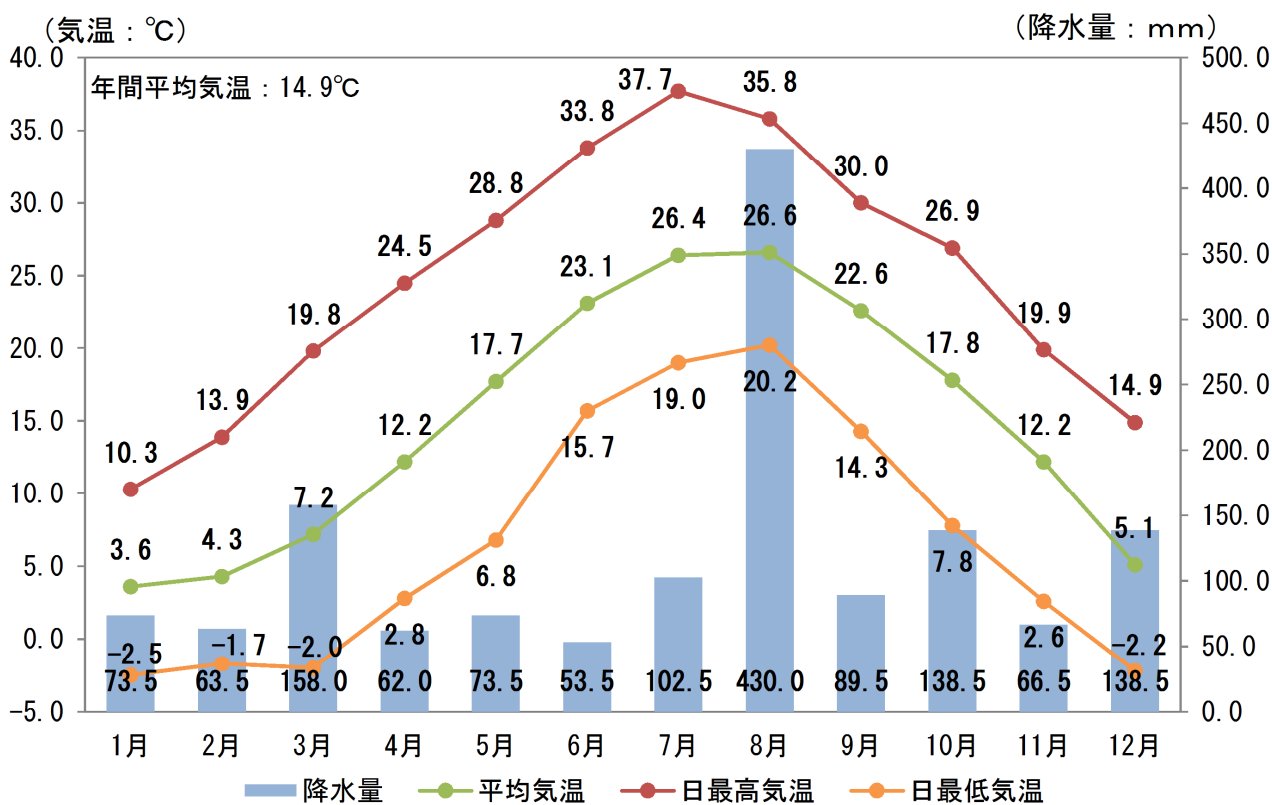
(3) 気候

本市は、北陸型・瀬戸内型・東海型気候区の境界付近に位置する。寒い時期には、若狭湾からの気流が入って雪が降り、暑い時期には、大阪湾や伊勢湾からの気流が入りやすい都市である。

また、琵琶湖に接していることから、滋賀県内の内陸部や山間部に比べて気温の上昇・下降が抑制される傾向がある。

平成27年(2015年)の年間平均気温は14.9℃である。月別平均気温が最も高いのは、8月の26.6℃であり、最も低いのは1月の3.6℃である。また、日別気温が最も高いのは、7月の37.7℃であり、最も低いのは1月の-2.5℃である。

年間の降水量は、1,449.5mmである。月別では8月が430.0mmで最も多く、3月が158.0mmで、これに次いでいる。なお、12月から3月にかけては、雪が残ることがあり、数日間、積雪が残る場合もある。



平成27年(2015年)の月別平均気温と降水量

2 社会的環境

(1) 市の沿革

現在の市域は、旧4郡にわたっており、北から坂田郡、犬上郡、愛知郡、神崎郡であった。明治の初め頃は、10区に分けられていた彦根町が計10町余り、後に合併した部分の村数は、時期による変動はあるが、ほぼ100村程度とみられ、全体では旧4郡200町村を含んでいたことになる。これらが合併を繰り返すことになり、昭和12年（1937年）には、犬上郡であった彦根町とそれに隣接する3村（松原村・青波村・北青柳村）およびその南に接する2村（千本村・福満村）の計5村が合併し、市制を施行した。昭和17年（1942年）には、磯田村、南青柳村と合併し、その後、同25年（1950年）には日夏村、同27年（1952年）に坂田郡の鳥居本村、同31年（1956年）に河瀬村と亀山村、同32年（1957年）に高宮町と合併した。

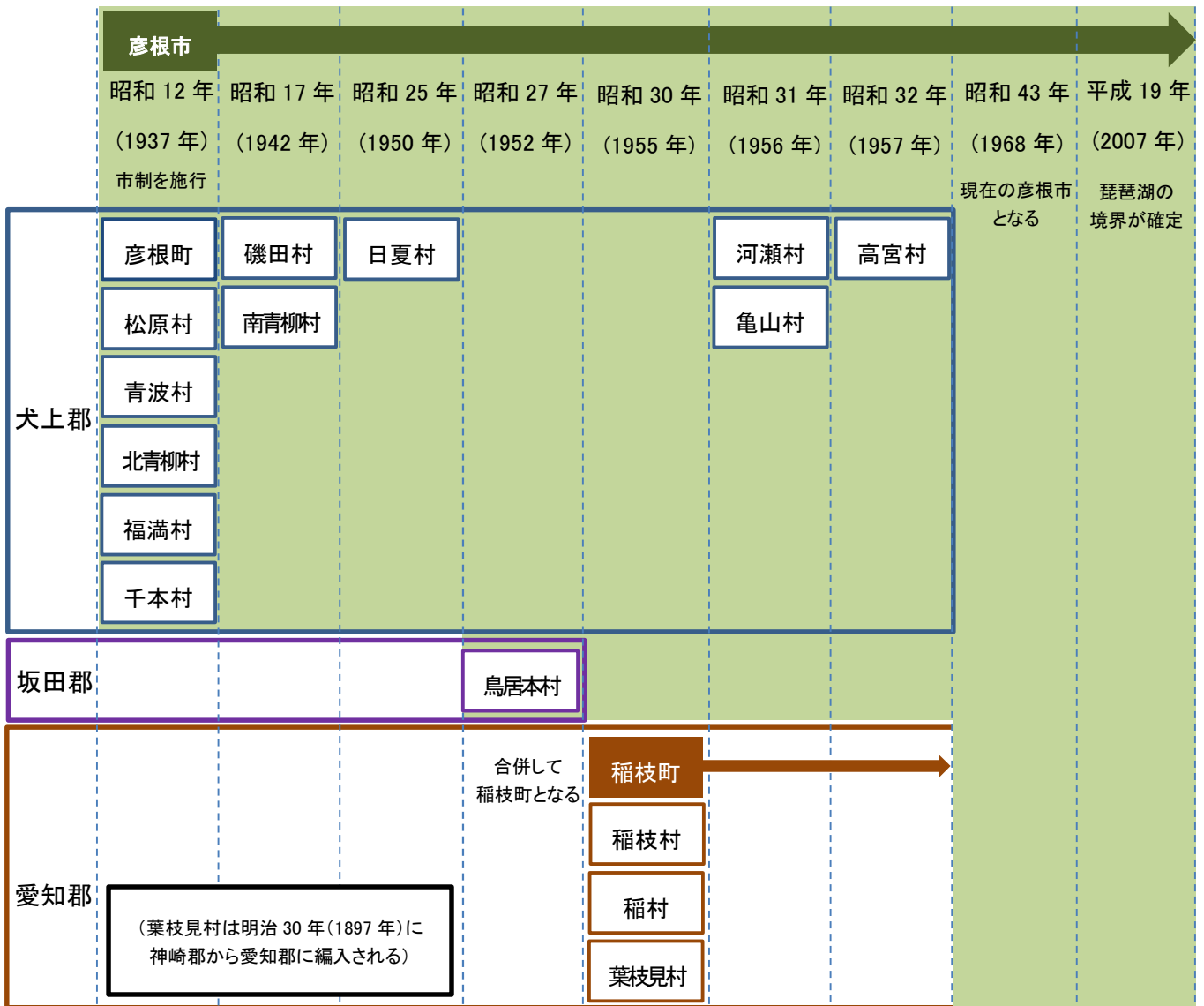
明治30年（1897年）に葉枝見村が神崎郡から愛知郡に編入し、昭和30年（1955年）に愛知郡の稲枝村、稲村、葉枝見村の3村が合併し稲枝町となり、同43年（1968年）に彦根市と合併し、現在の市の姿となった。平成19年（2007年）10月1日、琵琶湖における市町境界の確定にともなう編入により現在の市域となっている。



明治30年（1897年）に葉枝見村が神崎郡から愛知郡に編入される。

昭和30年（1955年）に稲村・稲枝村・葉枝見村が合併して稲枝町が誕生した。

彦根市に合併した旧町村（資料：新修彦根市史第12巻）



彦根市の合併の変遷

編入年月日	編入地域	編入面積 (km ²)	編入人口 (人)
昭和12年 (1937年) 2月11日	彦根町・松原村・北青柳村・青波村・千本村・福満村の1町5ヶ村が合併 【市制施行】	25.08	39,335
昭和17年 (1942年) 6月10日	磯田村	3.98	2,125
〃	南青柳村	2.73	1,381
昭和25年 (1950年) 4月1日	日夏村	3.55	1,928
昭和27年 (1952年) 4月1日	鳥居本村	23.22	3,607
昭和31年 (1956年) 9月30日	河瀬村	6.60	5,966
〃	亀山村	4.61	2,093
昭和32年 (1957年) 4月3日	高宮町	3.33	4,059
昭和43年 (1968年) 4月1日	稲枝町	25.21	11,883
平成19年 (2007年) 10月1日	琵琶湖における市町境界の確定	98.69	—
平成26年 (2014年) 10月1日	琵琶湖における市町境界の確定 (国土地理院による面積計測方法の変更)	98.59	—

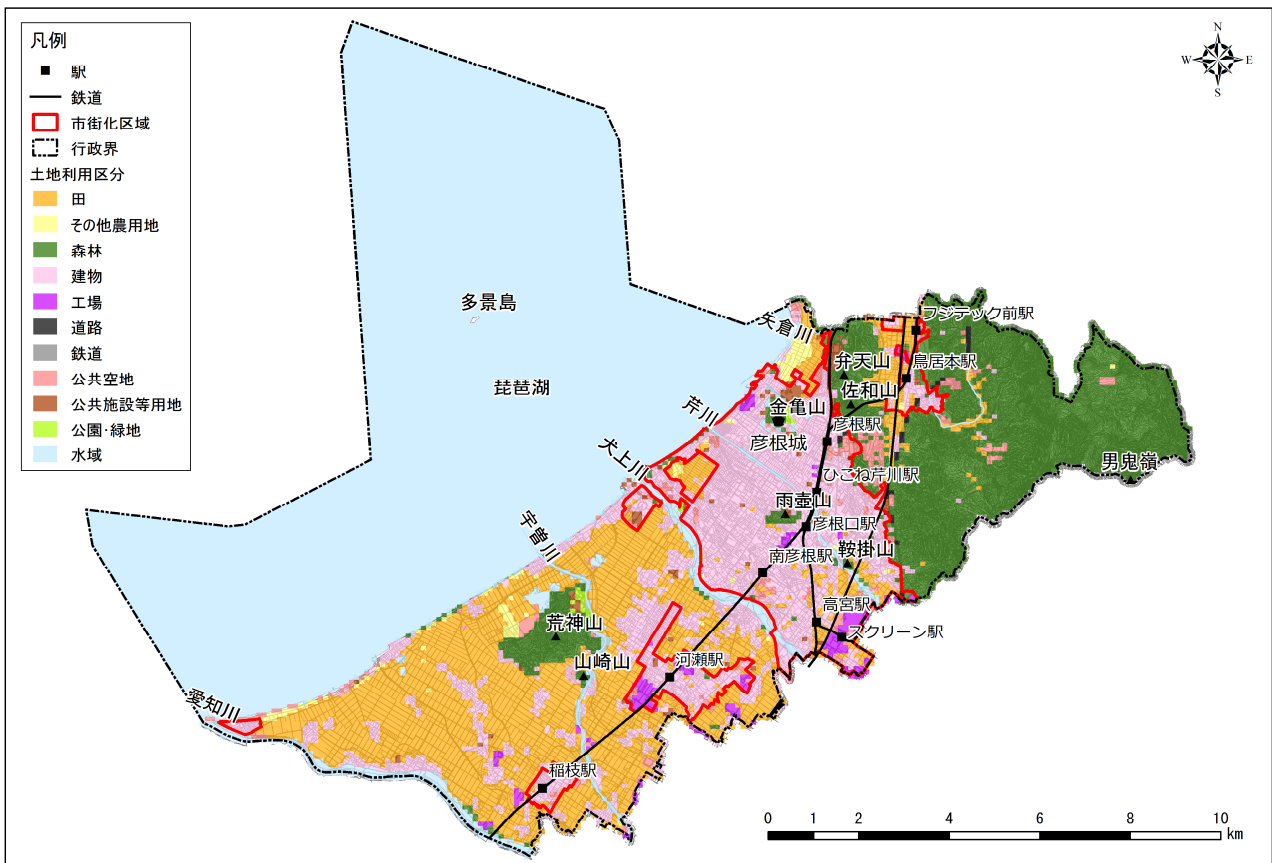
(注)昭和50年4月1日、昭和58年6月1日、平成元年11月1日、平成26年10月1日の面積変更により、現在の面積と一致しません。

彦根市域の変遷

(2) 土地利用

本市の平地部の土地利用は、約26%が山林で、残り約74%が平地である。日本一大きく、世界でも有数の歴史をもつ古代湖である琵琶湖の東岸に位置する本市は、東に広がる鈴鹿山系から流れる芹川、犬上川、宇曾川、愛知川が肥沃な穀倉地帯を形成しながら琵琶湖に注いでおり、彦根城を中心として旧城下町の市街地と新しく形成された市街地、そして農山村地域の大きく3つの地域性をもった良好な景観と生活環境をもったまちである。

都市計画区域は、市内全域（琵琶湖の一部を含む）196.87 km²のうち、陸地部分の98.28 km²が指定されている。この都市計画区域のうち、市街化区域面積は、26.2%の25.72 km²にあたり、残り73.8%の72.56 km²を市街化調整区域が占める。

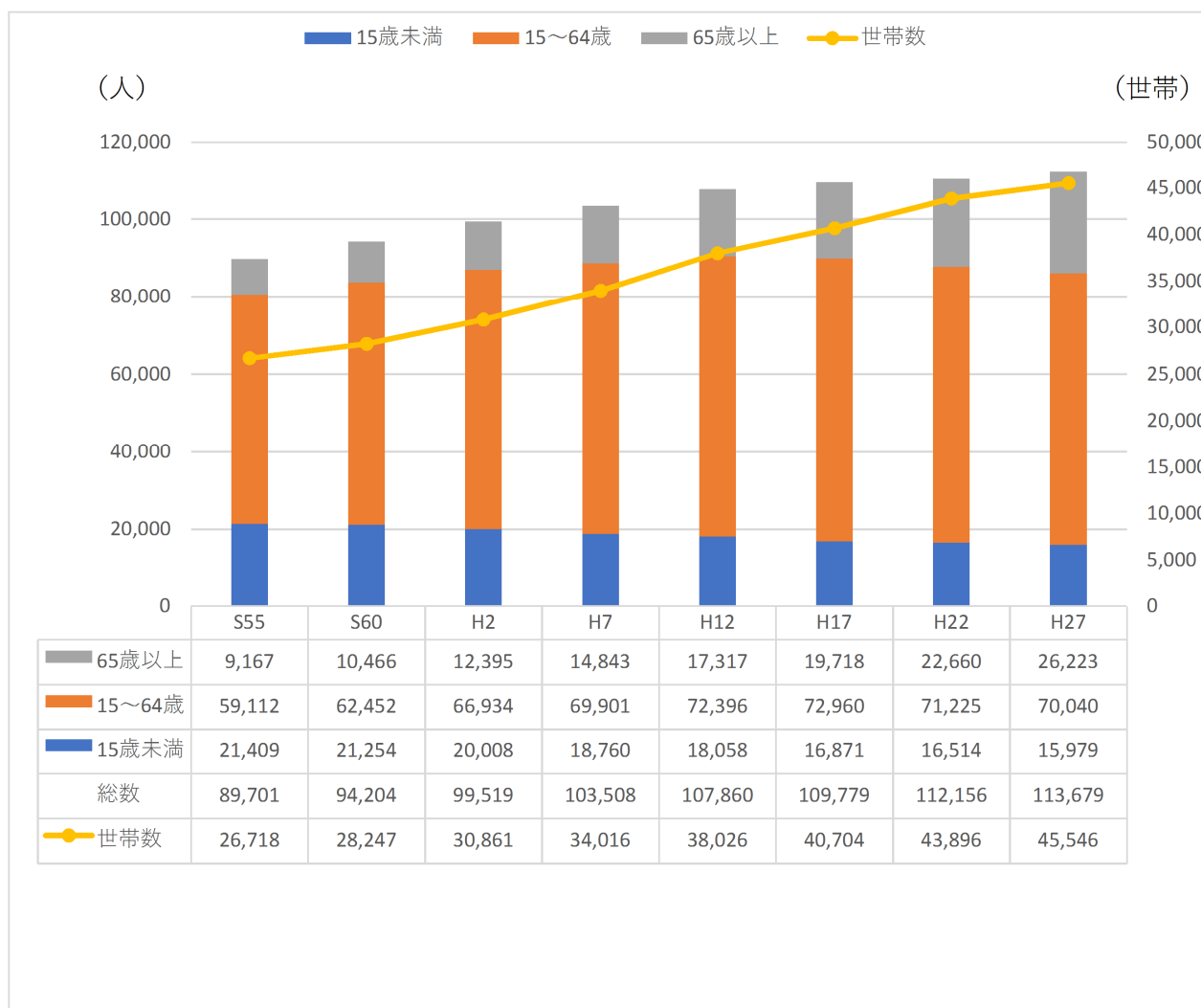


彦根市土地利用現況図

(3) 人口動態

本市の人口は、昭和55年（1980年）時点で89,701人であったが、平成27年（2015年）時点で113,679人となり、約1.27倍に増加している（人口は両年とも国勢調査結果による）。

平成27年（2015年）時点の年齢別の割合は、15歳未満15,979人（14.2%）、15歳以上64歳以下70,040人（62.4%）、65歳以上26,223人（23.4%）となっており少子高齢化が進んでいることがわかる。



出典)国勢調査(総務省統計局)※年齢不詳は含まない

彦根市の人口・世帯の推移

（４）交通機関

古来より近畿圏・中部圏・北陸圏の交通結節点として位置づけられ、人々の往来が盛んに行われていた。

「道路」

市内の道路では、京阪神および中京方面を結んでいる名神高速道路、新潟と京都を結んでいる国道8号、本市と津市を結ぶ国道306号などの主要幹線が通過し、国土交通軸上にある本市は、鉄道とともに近畿圏と中部圏を結ぶ広域交通の結節点として、琵琶湖東北部、特に湖東の中心として着実な発展をとげてきた。

「鉄道」

市内には、米原駅と京都駅を結ぶJR琵琶湖線（東海道本線）と、米原駅と貴生川駅を結ぶ近江鉄道（本線）および高宮駅と多賀大社前駅を結ぶ近江鉄道（多賀線）による鉄道網が形成されている。JR琵琶湖線には、彦根駅、南彦根駅、河瀬駅、稲枝駅の計4駅、近江鉄道（本線・多賀線）には、フジテック前駅、鳥居本駅、彦根駅、ひこね芹川駅、彦根口駅、高宮駅、スクリーン駅の計7駅がある。

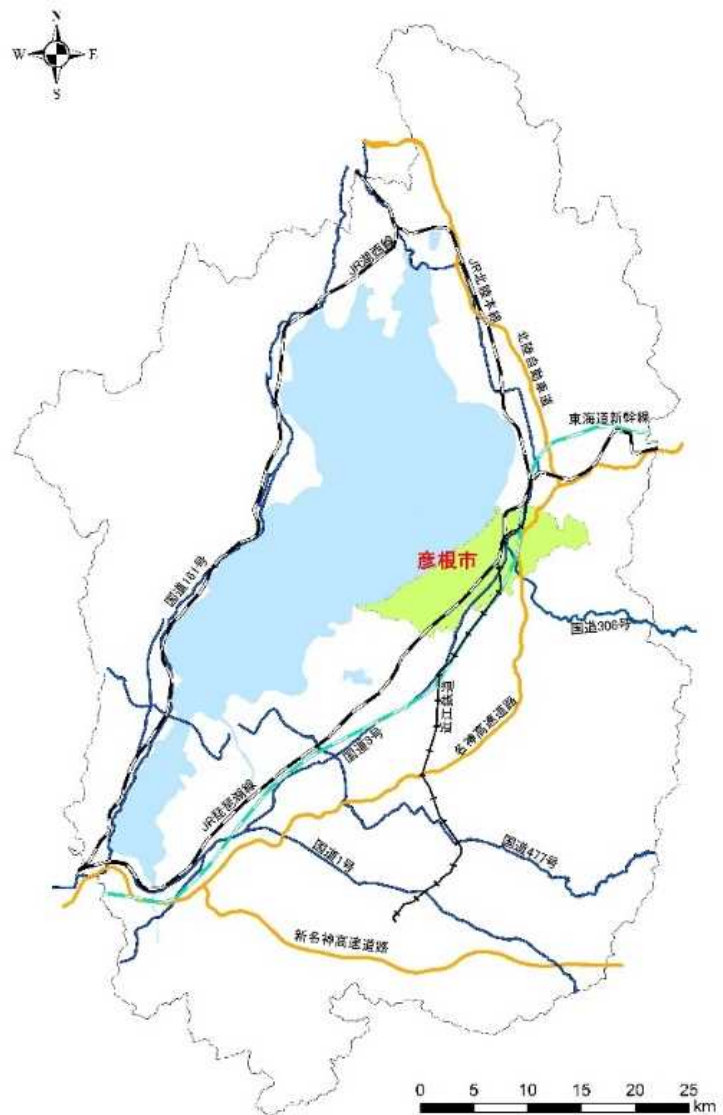
特に、彦根駅では、JR琵琶湖線と近江鉄道（本線）が乗り入れている。

「路線バス」

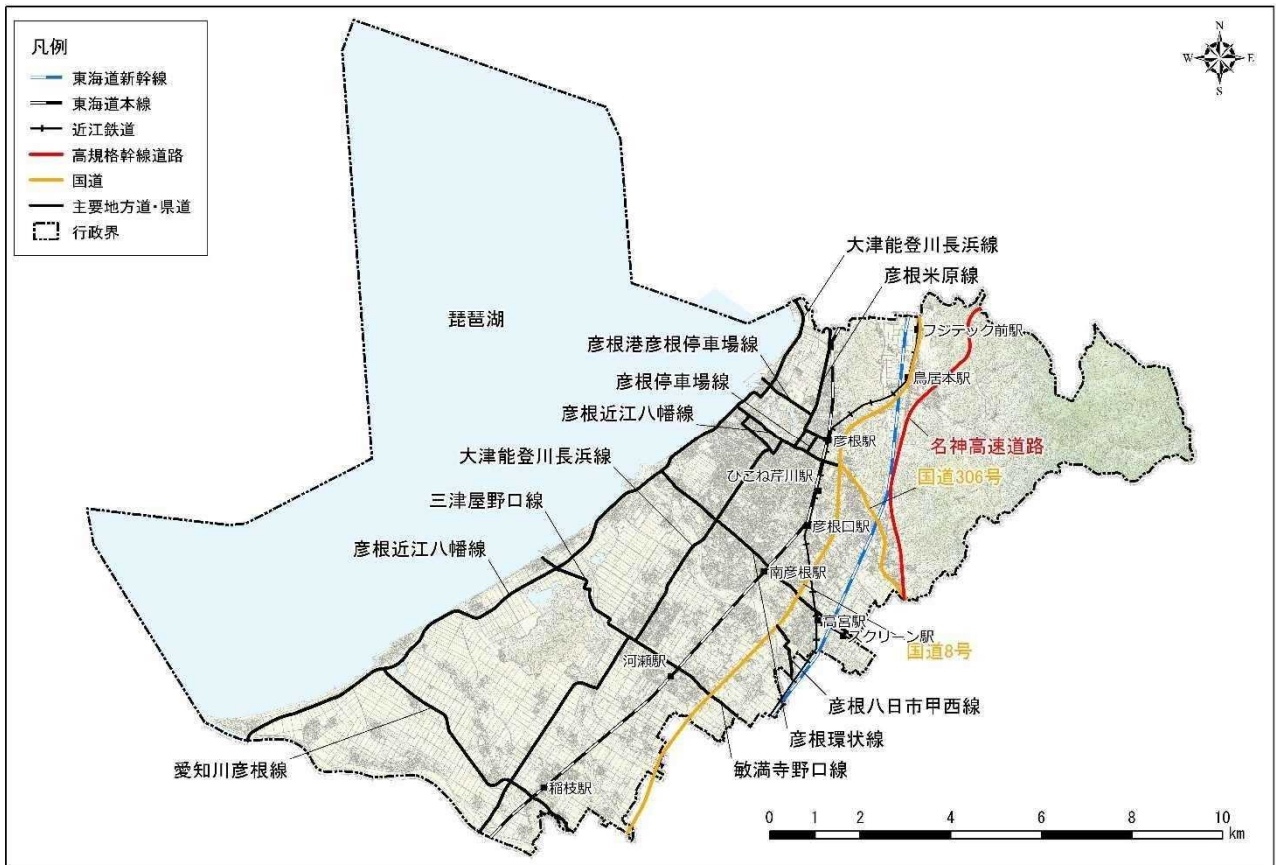
市内の路線バスは、隣接する多賀町、甲良町を跨ぐ2路線を含め9路線が運行されており、彦根駅、南彦根駅などの鉄道に接続し、病院などへの交通手段となっている。

「予約型乗合タクシー」

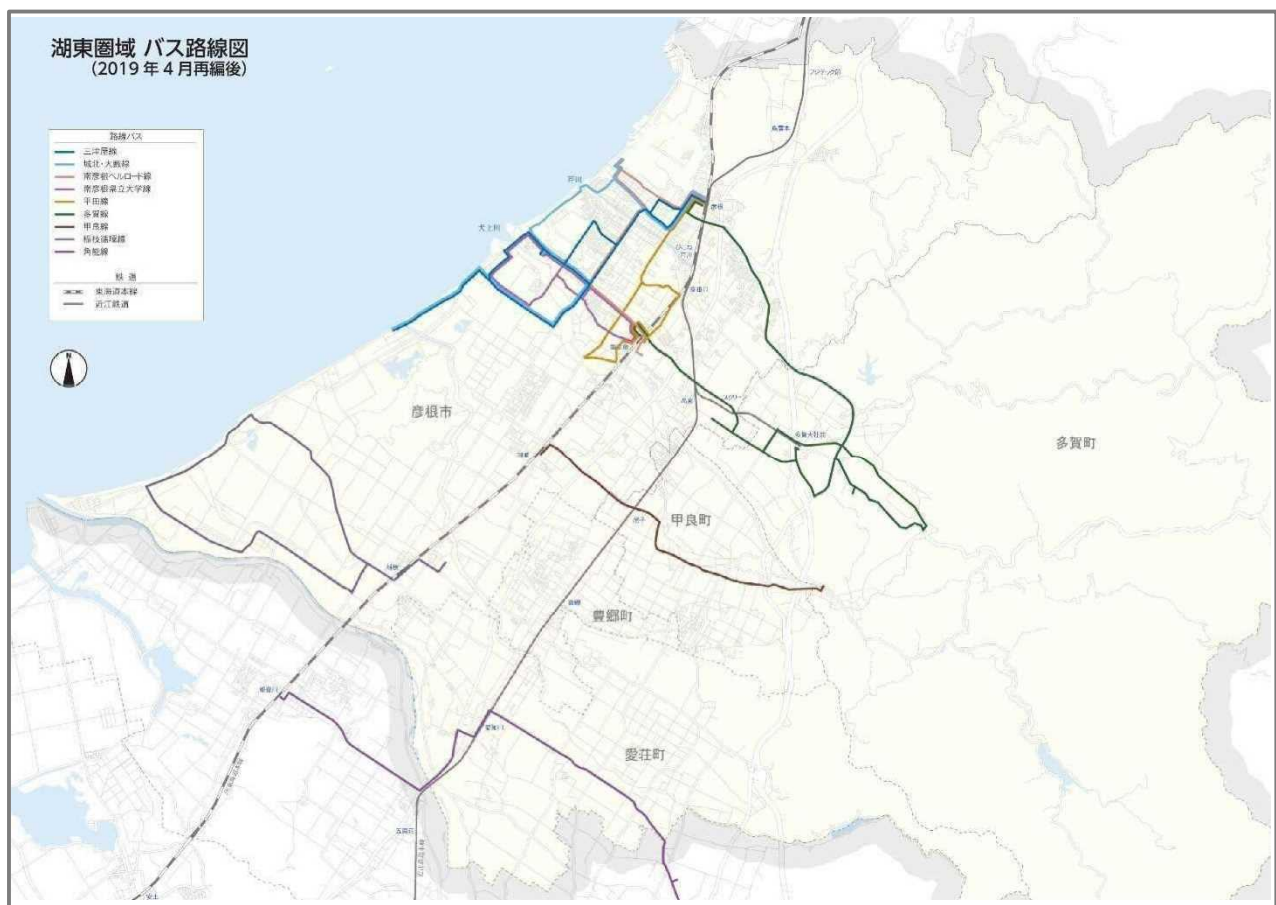
本市では、主に高齢者や自動車を利用されない方の日常生活に必要な移動の支援を目的に「予約型乗合タクシー（愛のりタクシー）」を運行している。



彦根市の交通網



彦根市交通網位置図



湖東圏域バス路線図 (令和7年4月現在)

(5) 産業

本市の工業では、繊維工業・紡績産業やセメント工業が初期の企業群として立地発展してきた。現在では、電気・機械・シートベルト関連などの企業のほか、半導体製造、輸送用機器、薬品などの企業が立地し、地域経済の牽引役を果たしている。また、城下町としての伝統を生かして、長い歴史の中で培われた3つの地場産業として、彦根バルブや彦根仏壇、彦根ファンデーションがあり、中でも豪華で荘厳な彦根仏壇は、江戸時代の武具づくりの技術から発展したと言われている。

	平成7年 (1995年)		平成12年 (2000年)		平成17年 (2005年)		平成22年 (2010年)		平成27年 (2015年)	
	就業人口 (人)	構成比 (%)	就業人口 (人)	構成比 (%)	就業人口 (人)	構成比 (%)	就業人口 (人)	構成比 (%)	就業人口 (人)	構成比 (%)
第一次産業	2,332	4.5	1,557	2.9	1,569	2.9	1,018	1.9	988	1.8
第二次産業	20,886	40.2	20,323	38.4	18,612	38.4	18,050	33.8	18,802	33.8
第三次産業	28,590	55.0	30,389	57.4	33,168	61.1	31,350	58.7	33,569	60.4
分類不能の産業	153	0.3	669	1.3	898	1.7	2,980	5.6	2,230	4.0
総数	51,961	100	52,938	100	54,247	100	53,398	100	55,589	100

産業（大分類）年次別15歳以上就業者数

「彦根バルブ」

明治時代半ばに、門野留吉がカラン製造用の^{かどのとめきち}鑄物施設と^{いもの}旋盤^{せんばん}を使って、バルブとコックの製造を開始したのが、彦根バルブの始まりと伝えられている。現在では、30社前後のブランドメーカーとそれを支える70～80社の関連企業で、彦根のバルブ業界が構成されている。主に、^{ちゅうてつ}鑄鉄製の素材を中心に、小さなサイズから3mもの大口径にいたる多種多様なバルブが生産されている。

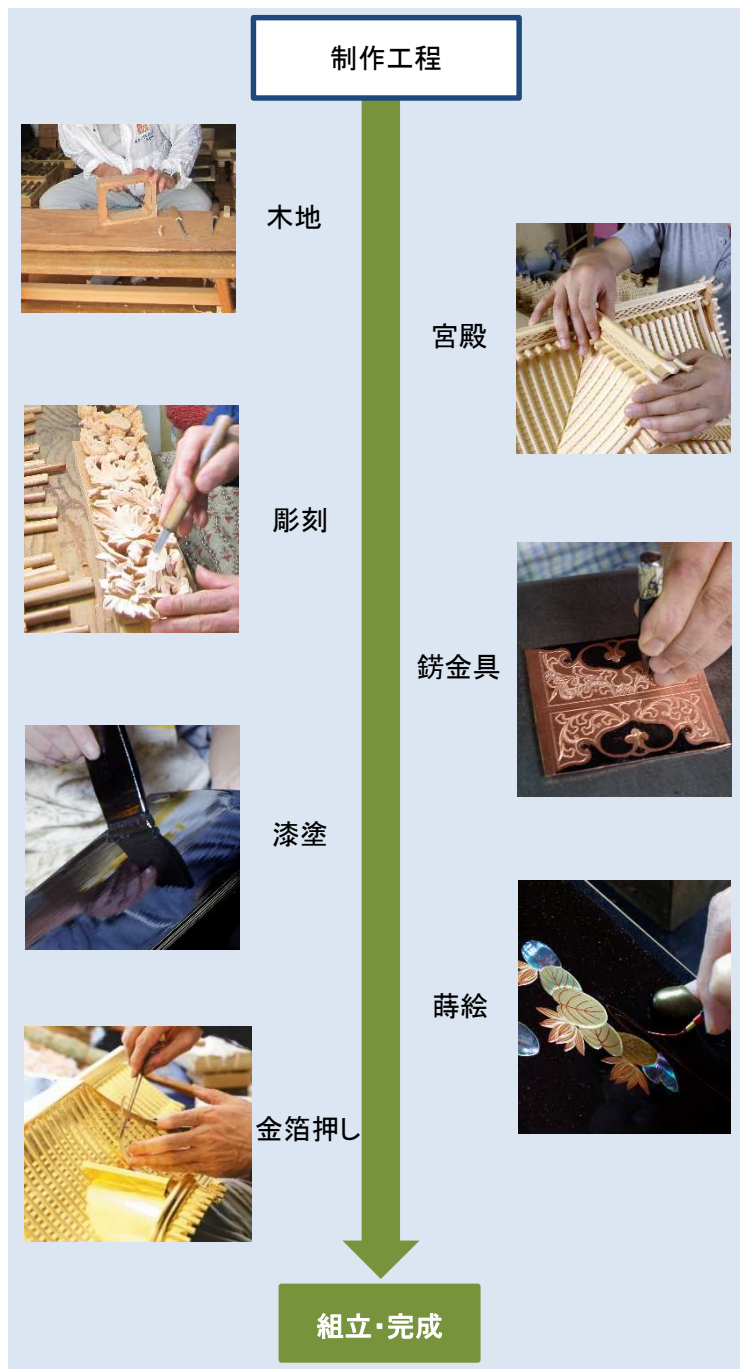


バルブ製造「彦根バルブ」

「彦根仏壇」

旧城下町の南端、中山道へと続く七曲がりを中心に、仏壇業が発達した。彦根仏壇は、^{きじ}木地、^{くうでん}宮殿、^{ちょうこく}彫刻、^{かざりかなぐ}鏝金具、^{うるしぬり}漆塗、^{まきえ}蒔絵、^{きんぱくお}金箔押しの七職に分かれ、それぞれの工程を経て仏壇が組み立てられる。

彦根仏壇は、^{せいせいうるし}杵組みによる宮殿造りや精製漆の手塗りなどによる秘術と技法を用いて制作される豪華で荘厳な雰囲気を持つ大型仏壇であるとともに、必要な道具の収納ができるなど日常の使用に便利な工夫がされていることなどが評価され、昭和50年（1975年）には、仏壇・仏具業界では、初めての国の伝統的工芸品の産地指定を受けている。また、平成25年（2013年）には、地域ブランドとして国の地域団体商標に登録された。



仏壇の制作工程



仏壇産業「彦根仏壇」

「彦根ファンデーション」

江戸時代半ばに連^{れん}着^{じやく}町（現本町三丁目など）の綿^{わた}屋^{やう}宇^へ兵^え衛^たが足袋の製造を始めてから、彦根は足袋の一大生産地となった。アジア太平洋戦争が終わり、洋装化が進むと、足袋の需要が落ち込み、生産が振るわなくなったが、縫製技術の伝統を生かして、輸出向けブラジャーの生産が始まった。その後、各種ファンデーション^{※1}などの生産が行われている。



下着縫製「彦根ファンデーション」

※1 ファンデーションとは、体型を整える補整機能のある下着のことで、ブラジャーやコルセットなどがある。

(6) 観光

本市の観光では、彦根城を中心に多くの観光客を集めている。近年の観光ニーズの多様化から、^{ゆめきょうぼし}夢京橋キャッスルロードや^{よんぱんちやう}四番町スクエアなど、彦根城の周辺地域が新たな観光スポットとして周知されるようになっている。

また、平成19年(2007年)の「国宝・彦根城築城400年祭」の開催に加え、平成20年(2008年)から平成22年(2010年)の「井伊直弼と開国150年祭」や平成27年(2015年)の「井伊直弼公生誕200年祭」が開催されたことなどにより、観光客が増加し賑わいを見せている。

近年の「ご当地キャラ」ブームの火付け役となった「ひこにゃん」は、「国宝・彦根城築城400年祭」の開催に合わせて、井伊家2代当主の井伊直孝が^{な お た か}豪徳寺の門前に手招きする猫に^{ごうとくじ}誘われ寺に立ち寄ったところ、雷雨になって難をのがれたという招き猫の故事にちなんで生まれた本市のキャラクターであり、本市に特別住民登録を済ませた「ひこにゃん」は、年代層を超えて多くの人々に癒しを与えてくれる。



ひこにゃん



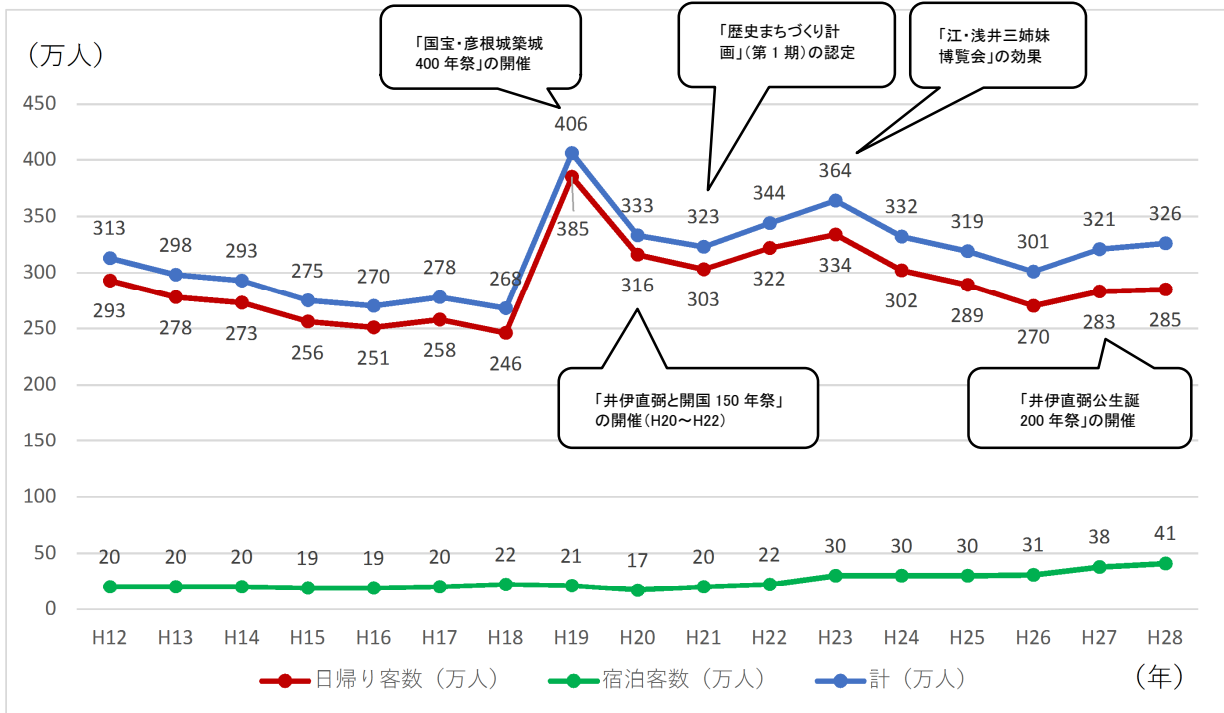
ひこにゃん特別住民票



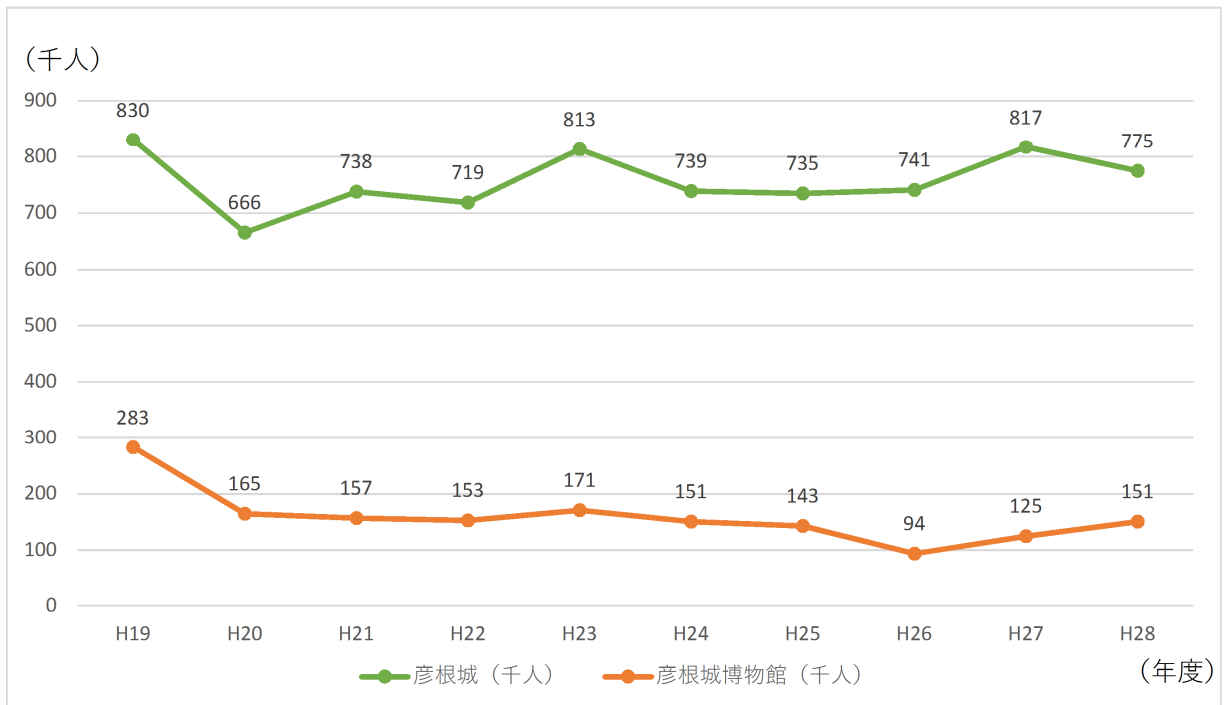
夢京橋キャッスルロード



四番町スクエア



観光入り込み客統計調査



彦根城および彦根城博物館の入込客数の推移

3 歴史的環境

城のまち彦根は、江戸時代を通じて彦根藩の政治・経済・文化の中心として発展してきた。

しかし、彦根の歴史の第一歩は、江戸時代をはるかに遡り、現在も各所にその面影をとどめている。

(1) 彦根の原始・古代

市内において、明確に人類の営みが確認できるようになるのは、縄文時代である。この時代の遺跡として代表的なものとして、福満遺跡と松原内湖遺跡がある。福満遺跡からは、縄文時代中期末頃を中心とする土器が大量に出土し、松原内湖遺跡からは、多数の丸木舟や狩猟用の弓、櫛などの装飾品が出土するなど、豊かな大地と湖の恩恵に浴しながら、漁労・採集そして狩猟の日々を送った人々の足跡が数多く確認されている。以後、稲作技術が伝わると、水管理の容易な琵琶湖岸や河川流域を中心に弥生時代の遺跡が点在するようになり、古墳時代へ継承されていく。

稲作技術の改良や耕地の拡大により人々の生活はしだいに安定していったが、一方では、農耕に必要な水や土地をめぐる争いも恒常化し、やがて農耕がもたらした富を一元的に掌握する支配者が出現した。近年、この段階の近江湖東地域における地域勢力の集中過程、支配者の出現と成長を考えるうえで、成果があった。それは、本市の南部、稲部町と彦富町にまたがって所在する稲部遺跡と稲部西遺跡である。この遺跡からは、平成25年度（2013年度）から28年度（2016年度）の発掘調査において、銅や鉄の製品を生産していた遺構、祭祀に関係する遺構や首長の居館と考えられる大型の建物跡、数多くの竪穴住居が確認され、古墳時代初頭の国家形成段階における近江地域での中心的な集落であったことが明らかとなりつつある。

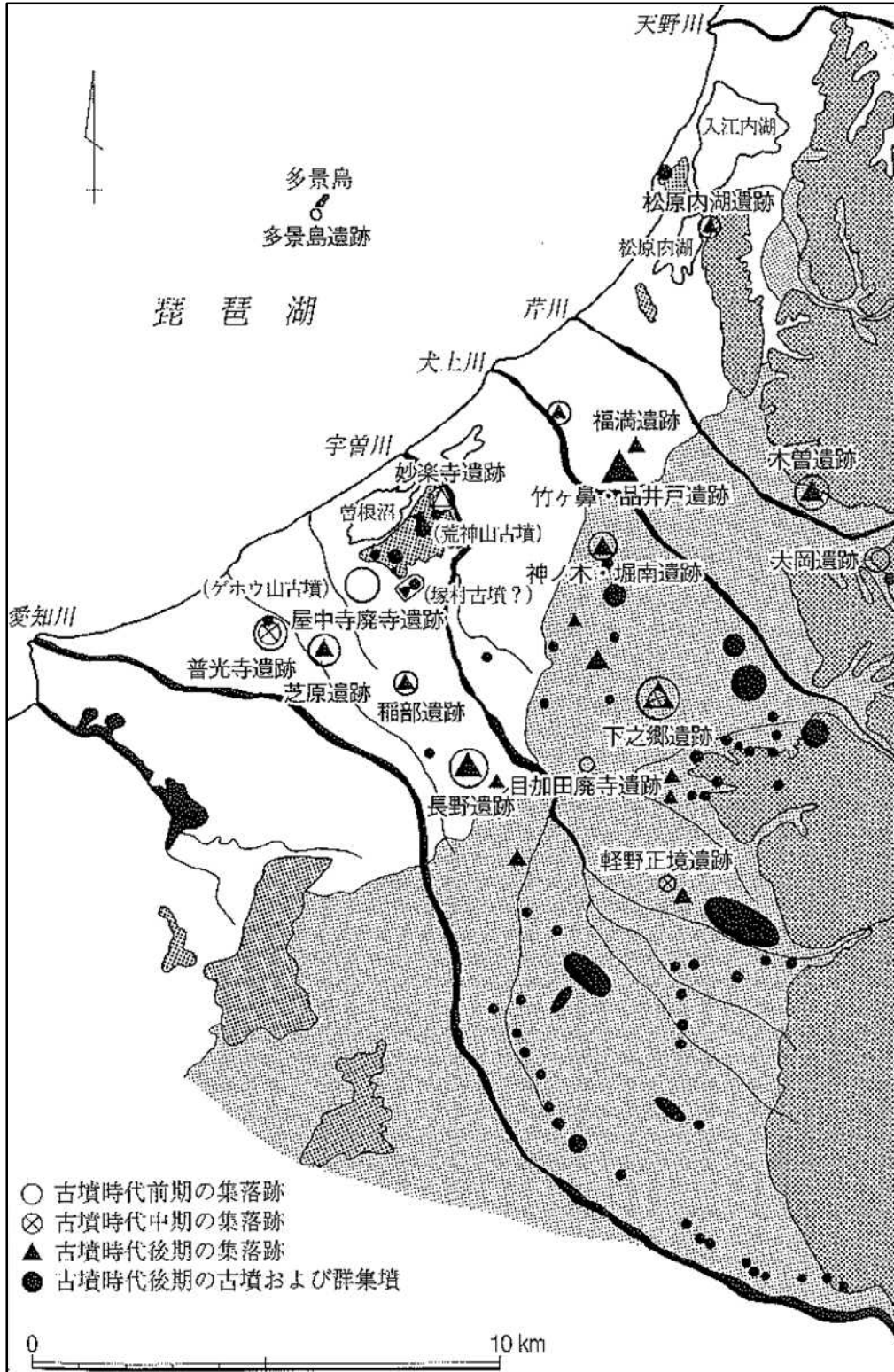
また、次の段階、古墳時代前期に荒神山の山頂付近に築かれた荒神山古墳は、全長124mを測る滋賀県下第2位の前方後円墳である。荒神山古墳の被葬者は、湖上交通にかかわる支配者であるとともに、琵琶湖の湖上権を掌握し、大和政権とも深いつながりをもった人物と推測されている。

一方、荒神山の山中には、古墳時代後期の群集墳を数多く確認することができる。農業生産力がしだいに向上していく過程で、支配者に従属する人々の側でも階層差が拡大し、家父長層も小古墳を群集させて築造するようになった。また、この中には、ドーム状天井の玄室を持つ朝鮮半島の古墳の影響を受けたものもあり、渡来系の集団が技術者として中央権力によって、この地域に居住されていたことがうかがえる。

仏教の到来は、富と権力の誇示を古墳から寺院へと変化および発展させた。荒神山の西南の平野部に築かれた屋中寺廃寺、普光寺廃寺をはじめ、市内には竹ヶ鼻廃寺、高宮廃寺など白鳳時代に遡る古代寺院が数多く築造され、古代権力者の集中する地域であったことを物語っている。その一部は、先述したように前時代から近江に多く配置された渡来系氏族であった可能性が考えられる。

奈良時代に東大寺による覇流村、水沼村の開発があり、平安時代には犬上庄・後三条勅旨田、

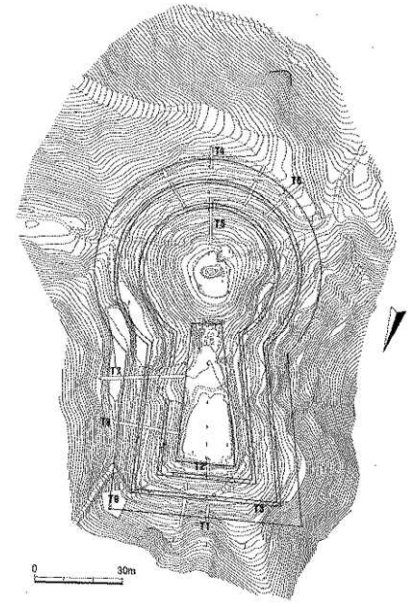
善理庄、清水庄、栗見庄、平流庄、因幡庄、吉富庄などの荘園が成立、中世に入ってさらに沼波庄、高宮保、高宮庄、八坂庄、福光保、河瀬庄、日夏庄、小野庄などが史料に登場する。これらには、延暦寺関係の荘園が多く、門跡領ないしは坂本日吉社領として伝えられた。また、東大寺領覇流荘は、正倉院宝物の中に『近江国覇流村墾田地図』として水沼荘とともに絵図が残されている。これは、開墾についての勅を伝える太政官符を受け、両村の100町の水田を開墾したことを国司が報告したもので、荘園成立に関わる第一級の資料となっている。



犬上川など流域の集落と古墳（資料：新修彦根市史第1巻に加筆）



荒神山と荒神山古墳



荒神山古墳復元
想定図

(2) 彦根の中世

近江は、京の都に隣接し、古代より東山道、東海道、北陸道などの官道が通過する要衝の地である。中世を通じて、この近江を領し、強大な権力を誇ったのが近江に基盤を持つ佐々木氏である。佐々木氏は、やがて湖南の六角氏と湖北の京極氏に分裂し、一族ながら覇権争いを繰り返すようになる。両勢力の境目に位置する彦根では、在地の国人・土豪たちが一族の存亡に腐心しつつ争いに巻き込まれていくことになり、早くから防御のための城館が発達した。

中でも境目の城として、顕著な役割を担ったのが佐和山城である。六角氏と京極氏、後には浅井氏を巻き込んだ攻防により、幾度となく佐和山城争奪戦が展開された。

一方、のちに彦根城が築城される彦根山は、古くから観音の靈験所として都にまで知られた彦根寺があり、平安時代には白河上皇など都人が数多く参詣した。今日まで残る巡礼街道は、そうした人々の往来により



佐和山城絵図（彦根城博物館蔵）に加筆



大手から望む佐和山城跡

整備された「信仰の道」であったが、そののち織田信長が街道沿いに安土城を築く頃には、武者の駆ける下街道と呼ばれ「天下布武の道」となった。

（3）彦根の近世

信長と秀吉の時代にも、佐和山城は近江の要衝を守る城として重視された。信長は、佐和山城に重臣の丹羽長秀を配し、安土城築城までの間、佐和山城が安土城の機能を担った。秀吉の時代も、堀秀政、堀尾吉晴そして五奉行筆頭の石田三成の入城と、佐和山城に重きを置く姿勢は変わらなかった。この間、佐和山城はしだいに整備され、山上に本丸以下、二の丸、三の丸、太鼓丸、法華丸などが連なり、山下は東山道に面して大手門が開き、2重に巡らされた堀の内には侍屋敷、足軽屋敷、町家などの城下町が形成された。

慶長5年(1600年)、天下分け目の関ヶ原合戦から2日後、小早川秀秋ら関ヶ原の寝返り組を主力とする部隊が佐和山城を包囲した。城主石田三成は、関ヶ原に敗れて湖北へ逃走中であり、このとき佐和山城には、三成の父正継を主将に兄の正澄らが布陣していたという。佐和山の守りは固く、執拗な攻撃



関ヶ原合戦図（彦根城博物館蔵）

によく耐えたようだが、兵力の違いは如何ともし難く落城した。関ヶ原合戦後の論功行賞により、佐和山城を与えられたのは、彦根藩の初代藩主となる井伊直政であった。慶長6年(1601年)正月、直政は上野国高崎城(群馬県高崎市)より佐和山に入る。ところが直政は、関ヶ原合戦で受けた鉄砲傷が悪化して翌年死去。直政より後事を託された家老木俣守勝は、城の移築計画を徳川家康に諮る。佐和山、彦根山、磯山(米原市)の3山を候補に、彦根山への移築が決定した。

① 彦根城の築城

慶長9年(1604年)7月1日、佐和山城の西方約2kmの彦根山において、新たな築城工事が始まった。彦根城の築城は、およそ20年を要した。前期工事は、本丸や鐘の丸などの城郭主要部が築かれた。幕府から6人の奉行が派遣され、近隣諸国の大名に助役が命ぜられるなど、天下普請の様相を呈していた。豊臣恩顧の大名が多い西国へのおさへの拠点と意識され、完成が急がれたのである。そのため、普請に必要な材木や石材を周辺の古城や廃寺などから集めた。

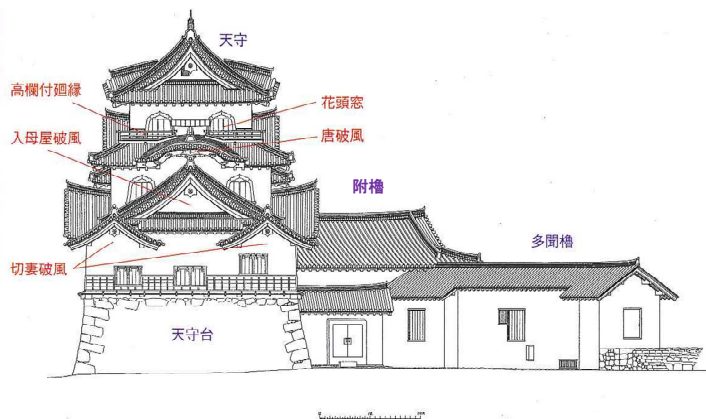
天守そのものが大津城天守を移築したと伝えている。今日風に言えば、彦根城はリサイクルの城であった。

完成された彦根城には、山頂に三階三重の天守がそびえ、その前後には鐘の丸、太鼓丸、西の丸が広がり、各種の櫓が天守を守備するように構築されている。また、太鼓丸と西の丸の端には、大堀切^{おおほりきり}があり、山の斜面には希有な構築物である登り石垣^{けう}が築かれており、それらが櫓や門、石垣などとも巧妙に連結して、高度に発達した軍事的防衛施設を形成している。

また、城本来の防衛施設とともに、山下には藩庁の機能をもった表御殿や2つの下屋敷（玄宮楽々園^{げんきゅうらくらく}、松原下屋敷^{まつばらしもやしき}）など城主の公的・私的な生活が営まれた居館施設が良好な形で現存し、復元されている。



御城内御絵図（彦根城博物館蔵）



国宝彦根城天守附櫓及び多間櫓 立面図



名勝玄宮楽々園と彦根城天守



名勝旧彦根藩松原下屋敷（お浜御殿）庭園

② 彦根城下町の成立

一方、彦根の城下町は、大規模な土木工事によって計画的に造られた。計画当初、城下は多くの^{ふち}の^あの^し沼のある^あの^し潤な土地が広がっていたため、現在の^{やすきよ}安清町あたりから北上して松原内湖に注いでいた^{せり}芹川(善利川)を、約2kmにわたって付け替えて琵琶湖に直流させ、一帯の排水を良くし、城下町の造成が行われた。このことで広大な面積の城下町を計画的に地割することが可能となった。また、この芹川は、敵の侵入を防ぐ最初の防御線ともなっていた。

完成した彦根の城下町は、三重の堀によって4つに区画されていた。内堀の内側の第1郭は、天守を中心として各櫓に囲まれた丘陵部分と、藩庁である^{おもてごてん}表御殿(現在の彦根城博物館)などからなる。

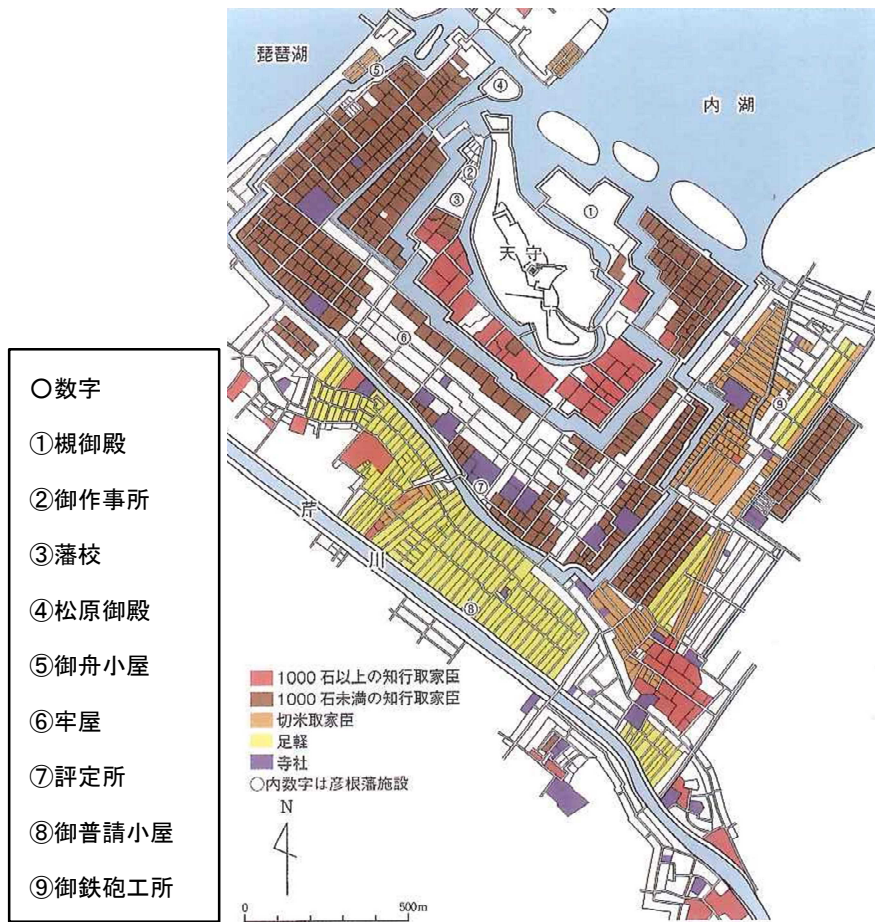
内堀と中堀に囲まれた第2郭は、藩主の下屋敷である^{けやき}榎御殿(現在の名勝玄宮楽々園)、^{さくじしよ}作事所や細工所といった藩の施設、家老など千石以上の重臣の邸宅が広がっており、さらに江戸時代後期には藩校も設けられ、^{うちぐるわ}内曲輪と称し、城下とは別格の取り扱いを受ける範囲となっていた。

中堀と外堀の間の第3郭は、武家屋敷と町人の屋敷が存在した。武士・町人あわせて居住しているが、居住地は明確に区分されており、堀に面した要所は武家屋敷と寺院で占められ、町人の居住区の大半はその内側に広がっていた。広い敷地を有する寺院は、一朝事ある時は軍事的役割も担っており、武家屋敷とともに外堀の防衛線を形成していた。一方、町人の居住区では、^{あぶらや}油屋町、^{うおや}魚屋町、^{おけや}桶屋町、^{しよくにん}職人町など、職業による分化配置が見られる。築城当初、特定の職能集団が集住させられた結果であろう。

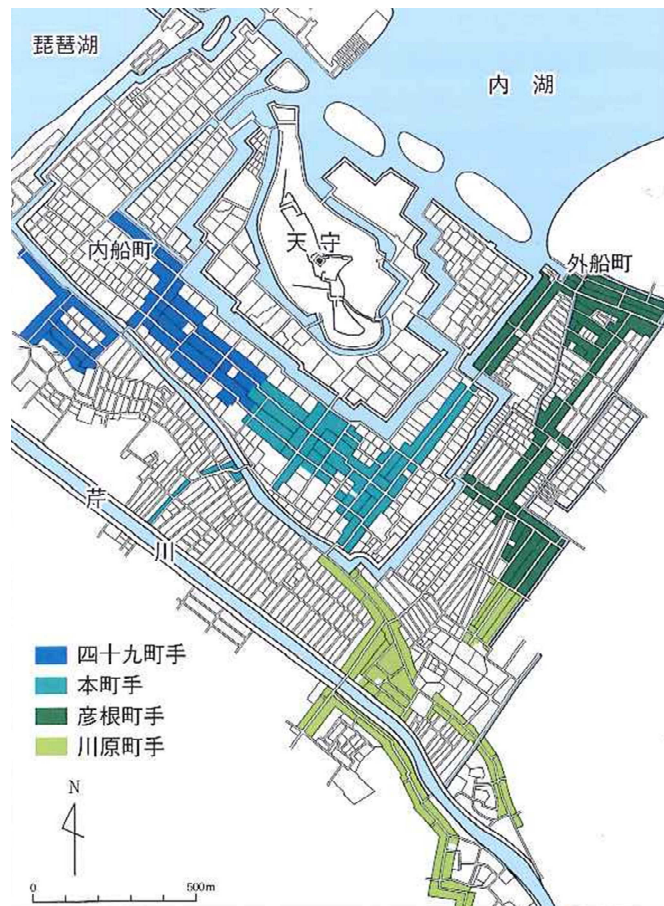
外堀の外側の第4郭は、町人の住居と足軽の組屋敷が配置され、家老の広大な下屋敷が置かれたのもこの地域であった。彦根藩の足軽は、^{しも}下組(中藪組、池須町組)、^{なかつぶ}善利組、^{いけす}上組(大雲寺組)、^{せり}北組(切通組)、^{かみ}中組、^{だいうんじ}鐘叩町で構成されていた。足軽組屋敷は、外堀の外側に、城下を取り囲むように屋敷を連ねて、彦根城と城下町を守備する役割も担っていたのである。彦根城とその城下町は、日本の長い城郭史の最盛期に造られた城郭都市であるとともに、その後の幕藩体制250年余の平和な時代を維持し、日本の近世を推進させた典型的な城郭都市であり、今日でも往時の面影が色濃く残り、また城下町特有の様々な伝統文化が今なお現代に引き継がれて随所に息づいている。

一方、城下町よりおよそ2km東側の山手には中山道が走り、高宮宿と鳥居本宿が宿駅の機能を維持し、両宿からは、城下へ向かう彦根道が伸びていた。

また、^{ちょうせんつうしんし}朝鮮通信使が往来した^{ちょうせんじん}朝鮮人街道が、彦根の城下町を経由した。この朝鮮人街道を通り朝鮮通信使は、江戸時代を通して10回彦根を通り、多い時で総勢400人ほどの使節が彦根城下の宗安寺、明性寺などいくつかの寺社に滞在した。これら多くの人が行き交った朝鮮人街道は、国際的な文化交流としての役目も担っていた。



江戸時代の彦根城下の主な公的施設と武士居住区（資料：新修彦根市史第10巻）



彦根城下の町人居住区（資料：新修彦根市史第10巻）

（4）彦根の近・現代

彦根の旧城下町は、明治初期には廃藩により没落した士族が旧城下町から転出することが続いたため人口減少が続いた。明治5年（1872年）の人口は25,285人であったが、同22年（1889年）には17,466人の最低値を記録した。しかし、明治23年（1890年）以降は、人口増加に転じた。この要因としては、明治10年代後半から製糸業が興り、明治20年代に広く定着したことの影響もあるが、明治22年（1889年）の東海道線の敷設と彦根駅の建設の影響が大きかった。

旧城下町の近代化は、明治12年（1879年）の第百三十三国立銀行の営業開始と明治22年（1889年）の東海道線彦根駅の開業に始まった。その後、彦根藩士族や湖東地域の近江商人が中心になり私鉄開業の動きが始まり、彦根、八日市、貴生川間に近江鉄道が敷設され、結果として彦根は、湖東地方随一の商業都市へと発展した。金融業などの建造物では、信用組合として県下初に建てられた旧彦根信用組合本店（大正13年（1924年）築、現俳遊館）、旧明治銀行（大正9年（1920年）築、現滋賀中央信用金庫銀座支店）、旧本町郵便局舎、旧川原町郵便局舎（現通信舎）などの近代化遺産が現存している。

公共機関としては、明治26年（1893年）に彦根測候所が建設され、その後の事業拡張に対応するため、昭和7年（1932年）に庁舎（現彦根地方气象台）が建設され現在に至っている。大正11年（1922年）には、県内の市町において高等教育機関の熱心な誘致運動が展開され、官立彦根高等商業学校（現国立大学法人滋賀大学経済学部）は、彦根に設置された。大学内には、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による陵水会館（昭和13年（1938年）築）や講堂（大正13年（1924年）築）が近代化遺産として現存している。

このように戦前の旧城下町は、公共・教育・金融機関に加え、繊維・バルブなどの工場や仏壇の製造所、多くの商家が建ち並ぶ、行政・教育・商工業の中心地であった。戦後は、大蔵省印刷局（現独立行政法人国立印刷局彦根工場）をはじめ、多くの企業を誘致し現在に至っている。

しかし、400年以上におよぶ城下町の歴史において、近・現代にはそれまでにない様々な景観的な変化も経験することになった。例えば、昭和2年（1927年）には、彦根の湖の玄関口として現在の船町交差点横に彦根港が造られ、昭和44年（1969年）まで使われた。昭和23年（1948年）には、昭和19年（1944年）から開始された松原内湖の干拓事業が完了し、内湖の風景が消えた。また、昭和24年度（1949年度）からの5か年計画により、マラリア対策の衛生土木工事が実施され、彦根城外堀が埋立てられた。昭和36年度（1961年度）には、銀座街で防災街区造成事業が始まり、昭和48年度（1973年度）に国内で2番目に完成した。城下町や城下隣接地の琵琶湖沿いには、近江絹糸、鐘紡、東洋繊維など繊維関係の工場が建設されたが、現在では大型商業施設や宅地、運動場などになっている。消防署や市立病院、文化ホールなどの施設も、旧城下町から市域中部へと移転した。昭和45年（1970年）の国勢調査では、旧城下町の人口が減少し、城下近郊地区の人口が増加するドーナツ化現象が明らかとなった。

一方では、城下町としての伝統を生かし、江戸時代以来の系譜を引く伝統的職人技による工芸として現在も受け継がれている仏壇、バルブ、ファンデーションの三つの地場産業がある。

このように、本市は、旧城下町としての市街地と新しく形成された市街地、そして農山村地域という3つの地域性をもった良好な景観と生活環境をもったまちである。

また、高等教育機関として滋賀大学、滋賀県立大学、聖泉大学、ミシガン州立大学連合日本センターの立地により、学術拠点としての機能を備え、これに加え、平成9年（1997年）には文化芸術や生涯学習などの拠点となるひこね市文化プラザが完成し、これらの学術文化などの集積を生かした学術と文化などのまちづくりが進んでいる。

一方、平成14年（2002年）には、市立病院を移転新築し、市民の健康保持増進における安心を支える基盤となっている。

平成18年（2006年）には、景観法に基づく景観行政団体となり、平成19年（2007年）に本市全域を対象とした「彦根市景観計画」を施行し、地域の良好な景観形成の推進に取り組んでいる。

そして、平成19年（2007年）の「国宝・彦根城築城400年祭」、平成27年（2015年）の「井伊直弼公生誕200年祭」、平成29年（2017年）の「国宝・彦根城築城410年祭」を開催するなど、本市の歴史資産を生かした催しを通してにぎわいの創出を行っている。さらに平成29年（2017年）には、市制施行80周年を迎えた。

（5）彦根市の歴史に関わりのある主な人物

いしだみつなり えいろく けいちょう
石田三成 永禄3年～慶長5年（1560年～1600年）

しよくほう
織豊期の武将で、近江国坂田郡石田村（長浜市石田町）の出身。豊臣秀吉に仕え、太閤検地や刀狩などの政策を推進した一人である。

また、五奉行の一人として秀吉没後の豊臣政権を支えた。天正19年（1591年）に秀吉直轄地を管理する代官として佐和山城に入り、文禄4年（1595年）には19万4000石を与えられ佐和山城主となった。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いに敗れて処刑された。



石田三成（龍潭寺蔵）

い い なおまさ
井伊直政 永禄4年～慶長7年（1561年～1602年）

彦根藩井伊家の初代。15歳のとき徳川家康の家臣となり、以後順調に功績をあげ、のちに徳川四天王と呼ばれるようになった。

直政の軍団は、井伊の赤備えとして有名である。交渉能力にも長け、徳川家康の天下統一に大きく貢献した。関ヶ原の戦いののち、佐和山城主となった。



井伊直政（彦根城博物館蔵）

い い なおたか てんしやう まんじ
井伊直孝 天正18年～万治2年（1590年～1659年）

彦根藩井伊家の第2代。44年以上もの間、藩主を務め、藩の礎を築いた。

また、幕府政治でも重きをなし、将軍徳川家光の側近くに仕えてその政務を補佐した。この役割は、のちの大老職につながるものであった。



井伊直孝（彦根 清凉寺蔵）

い い なおおき めいれき きやうほ
井伊直興 明暦2年～享保2年（1656年～1717年）

彦根藩井伊家の第4代で、江戸幕府の老成に2度就任した。延宝5年（1677年）に、藩主の下屋敷である槻御殿（現在の楽々園）の造営をはじめ、2年後に完成した。すべての家臣・領民から銭1文ずつの寄進を受け、佐和山の麓に
おおほらべんざいてん こんりゆう
大洞弁財天（長寿院）を建立した。



井伊直興（彦根 清凉寺蔵）

^{もりかわきよりにく}
森川許六 ^{しょうとく} 明暦2年～正徳5年（1656年～1715年）

彦根藩士で、元禄5年（1692年）に松尾芭蕉に入門した。

^{しょうもんじつてつ} 蕉門十哲の一人に数えられている。また、狩野派の絵画にも優れ、^{りょうたん} 龍潭寺（古沢町）の方丈襖絵は許六の筆と伝わり、彦根市の指定文化財になっている。



龍潭寺方丈襖絵

^{ひらいしくへいじ} ^{げんろく} ^{めいわ}
平石久平次 元禄9年～明和8年（1696年～1771年）

彦根藩士で、天文や暦学・数学に詳しく器用で行動力も備えていた。^{きょうほう} 享保17年（1732年）には、「^{りくしゅうほんしゃ} 陸舟奔車」という人力によるペダル式の車を製作した。これは、世界初の自転車ともいわれている。

^{い いなおなか} ^{てんぽう}
井伊直中 明和3年～天保2年（1766年～1831年）

彦根藩井伊家の第11代。文化芸術に関心が高く、能、茶の湯、^{けまり} 蹴鞠、^{こうどう} 香道などを^{たしな} 嗜んだ。^{かんせい} 寛政11年（1799年）に藩校稽古館を創設し、翌年には表御殿内に能舞台をつくった。



井伊直中（彦根 清凉寺蔵）

^{きぬやはんべえ} ^{まんえん}
絹屋半兵衛 寛政3年～万延元年（1791年～1860年）

彦根城下で呉服古着を商った。文政12年（1829年）に島屋平助らとともに、有田焼の職人を招いて絹屋窯を開き湖東焼をはじめた。天保13年（1842年）に藩に召し上げられ窯は藩の直営になった。

^{い いなおあき} ^{かえい}
井伊直亮 寛政6年～嘉永3年（1794年～1850年）

彦根藩井伊家の第12代。様々な品の収集に力を注いだことで知られ、特に現在彦根城博物館に収蔵されている雅楽器は、全国有数の雅楽器コレクションである。また、国宝の『^{しほんきんじちやくしよくふうぞくず} 紙本金地著色風俗図（彦根屏風）』は、直亮が購入し現在に伝わっている。



井伊直亮（彦根 清凉寺蔵）

^{しげやませんごろう} ^{ぶんか}
茂山千五郎 文化7年～明治19年（1810年～1886年）

^{おおくらりゅうきょうげんし} 大蔵流狂言師・茂山家の第9代で、天保13年（1842年）に彦根藩お抱えの^{かか} 狂言師になった。彦根城博物館の能舞台では、現在も茂山一門による狂言の公演が行われている。

井伊直弼 文化12年～安政7年（1815年～1860年）

彦根藩井伊家の第13代。青年時代には、埋木舎と自ら名づけた屋敷に住み、茶の湯・和歌・能・狂言・国学・居合などの文武諸芸を深く学んだ。自身の著書『茶湯一会集』で、茶の湯の理念を「一期一会」の4文字で表現した。幕末に江戸幕府の大老を務め、開国を決断した。



井伊直弼（彦根 清凉寺蔵）

長野義言 文化12年～文久2年（1815年～1862年）

江戸時代後期の国学者で、通称は主膳といった。国学では、井伊直弼が門弟になっている。直弼が藩主になると藩士に召し抱えられ、直弼の側近として、とくに京都の対朝廷工作で活躍した。

堤惣平 文政7年～明治24年（1824年～1891年）

中山道高宮宿で布問屋を営んだ。明治初期に評判を落とした高宮布の信用回復のため、「近江麻布蚊帳改会所」の設立に尽力した。このほか高宮村に堤器械製糸場を創設するなど高宮の産業発展に貢献した。

日下部鳴鶴 天保9年～大正11年（1838年～1922年）

旧彦根藩士で、明治元年（1868年）に書写の能力を評価されて明治政府の太政官権大内史という役人になった。明治12年（1879年）に役人を辞めてからは、書の道に専念し、近代を代表する書家として活躍した。



日下部鳴鶴（彦根城博物館蔵）

大東義徹 天保13年～明治38年（1842年～1905年）

旧彦根藩士で、明治23年（1890年）の第1回総選挙で衆議院議員に選ばれた。明治31年（1898年）の第一次大隈内閣では司法大臣となった。風貌が西郷隆盛に似ていたことから、「近江西郷」ともいわれた。



大東義徹（彦根市立図書館蔵）

西村捨三 天保14年～明治41年（1843年～1908年）

旧彦根藩士で、明治時代に国の役人になり、京都の平安神宮の創建や時代祭の開始などに尽力した。沖縄県令、大阪府知事等を務め、明治26年（1893年）に役人を辞めてからは、同年の近江鉄道の創立や明治34年（1901年）の「彦根城開城三百年記念祭」の開催にも深く関わった。



西村捨三

ひろ せすけさぶろう

弘世助三郎 天保14年～大正2年（1843年～1913年）

彦根の川添家に生まれ、4歳の時に弘世家の養子になった。明治10年代から第百三十三国立銀行の取締役役に就任するなど、銀行界に貢献した。明治22年（1889年）には有限責任日本生命保険会社（現日本生命保険相互会社）を創立した。



弘世助三郎

ぶ せつかんじ

武節貫治 天保14年～明治38年（1843年～1905年）

旧彦根藩士で、明治9年（1876年）に創建された招魂社（現在の滋賀県護国神社）の設立に尽力したほか、明治11年（1878年）の彦根製糸場（平田村）の開業、明治13年（1880年）の彦根中学校（現在の滋賀県立彦根東高等学校）の開校、明治19年（1886年）の女学校設立などにも尽力した。



武節貫治

かどのとめきち

門野留吉 弘化4年～明治41年（1847年～1908年）

犬上郡開出今村の尾本家に生まれ、京都で銚金具職かざりかなぐの技術を学んだ。明治7年（1874年）に門野家に養子に入り、銚金具職を続けたが、製糸業の勃興とともにカラン製造に転じ、後にバルブ製造に進んだ。これが彦根バルブの始まりである。

そうまながたね

相馬永胤 嘉永3年～大正13年（1850年～1924年）

旧彦根藩士の家に生まれた。明治13年（1880年）に開校した私立専門学校の専修学校（現在の専修大学）の創立者の一人である。井伊直弼けんしゅうの顕彰にも尽力し、明治42年（1909年）に完成した横浜の井伊直弼銅像の建設では、建設委員総代を務めた。



相馬永胤(彦根市立図書館蔵)

おおはしり ざえもん

大橋利左衛門 嘉永5年～明治21年（1852年～1888年）

日夏村戸長時代の明治11年（1878年）、樹木が少なく荒廃していた荒神山の植林を行った。連合戸長時代には、明治18年（1885年）の大水害後の田圃排水工事や日夏新道の改修を行った。昭和37年（1962年）、荒神山の麓に大橋の顕彰碑けんしょうひが建立された。



大橋利左衛門

ふなはしせいイチ

舟橋聖一 明治37年～昭和51年（1904年～1976年）

井伊直弼の波乱にとんだ一生を描いた『花の生涯』は、昭和38年（1963年）にNHKの第1回大河ドラマの原作となった。彦根市を全国に紹介し、観光の発展に多大の貢献をされ、郷土の偉人井伊直弼の業績を広く世に浸透させた功績から、昭和39年（1964年）、彦根市名誉市民の称号（第1号）を贈られた。昭和51年（1976年）に亡くなったのち、本市は遺族から膨大な蔵書を寄贈され、舟橋聖一記念文庫を開設した。



舟橋聖一(彦根市立図書館蔵)

4 文化財等の分布状況

琵琶湖の湖東に位置する本市には、国宝の彦根城天守をはじめ 184 件の文化財が所在している。令和8年(2026年)3月現在、国指定が24件あり、うち国宝が2件、重要文化財が17件、特別史跡1件、史跡2件、名勝2件である。また、重要伝統的建造物群保存地区が1件、登録有形文化財が56件(55棟1基)ある。県指定の文化財は13件、市指定の文化財が90件ある。その内容は、以下の表のとおりである。

彦根市の文化財 種別件数 (令和8年3月現在)

種別	国		県	市	計			
	指定・選定	登録	指定					
有形文化財	国宝		重文					
	建造物		1	8	56	4	33	102
	美術工芸品	絵画	1			1	13	15
		彫刻		5		3	18	26
		工芸品		3		2	5	10
		古文書		1		1	6	8
		書跡					1	1
		考古資料					4	4
民俗文化財	無形民俗文化財					4	4	
記念物	特別							
	史跡	1	2		1	2	6	
	名勝		2		1	2	5	
	天然記念物					2	2	
伝統的建造物群保存地区	重要							
		1					1	
計	25		56	13	90	184		

(1) 国指定文化財

本市には、令和7年(2025年)3月現在、国指定文化財が24件存在する。その内訳は、建造物9件、絵画1件、彫刻5件、工芸品3件、古文書1件、史跡3件、名勝2件である。そのうち建造物は、国宝の彦根城天守、附櫓及び多聞櫓たもんやぐらをはじめ重要文化財の彦根城太鼓門及び続櫓つづきやぐら、彦根城天秤櫓てんびんやぐら、彦根城西の丸三重櫓にしまるさんじゅうやぐら及び続櫓、彦根城二の丸佐和口多聞櫓にしまるさわぐちたもんやぐらそして彦根城馬屋うまやからなる彦根城跡内の建造物6件が含まれる。残る3件は、重要文化財の千代神社本殿ちよじんじや、長寿院ちようじゆいん、弁才天堂あらかわけおよび有川家住宅である。

また、記念物は、特別史跡の彦根城跡、史跡の彦根藩主井伊家墓所（清涼寺）、荒神山古墳の3件、名勝は、玄宮楽々園と旧彦根藩松原下屋敷（お浜御殿）庭園の2つの下屋敷^{しもやしき}である。その他の分野の指定も、彦根城跡周辺に集中し、残りが市内に散在する分布状況を示している。

なお、彦根城跡（国宝、重要文化財、特別史跡）、玄宮楽々園（名勝）、旧彦根藩松原下屋敷（お浜御殿）庭園（名勝）は、平成27年（2015年）4月24日付け認定（平成28年（2016年）4月25日追加認定）の日本遺産「琵琶湖とその水辺景観—祈りと暮らしの水遺産」の構成文化財である。

主な国指定文化財

彦根城天守、附櫓及び多聞櫓 【国宝・建造物】

彦根城天守、附櫓及び多聞櫓は、彦根山の山上にある本丸の西端の付近に建つ。その天守は、外観三重、内部三階で、地下への階段室及びその入口が附属する。天守の平面は、長方形で、南北に棟を通す。玄関は、天守の北東寄りに構えられている。天守の西北隅に附櫓が設けられ、附櫓の東北隅に多聞櫓が長く東の方にのびている。これらの建造物は、昭和26年（1951年）に重要文化財に指定され、翌年の昭和27年（1952年）に国宝として指定されている。



彦根城天守附櫓及び多聞櫓

天守の築城に関し、享保年間に編さんされた『井伊年譜』^{い い ねん ぶ}より、慶長11年（1606年）に大津城^{おおつ}の天守を移し格好よく仕直したものと解されて来た。昭和32年（1957年）に実施された天守の解体修理の調査では、この記事を裏書きする墨書^{ぼくしょ}が発見され、彦根城天守は、大津城から移築された可能性が高いと考えられている。

天守の外部装飾は、国宝の名に相応しく、鯨^{しやち}および棟紋瓦^{むなもんかわら}を金箔押しとし、唐破風は黒漆塗^{から は ふ}で仕上げられ、要所には金箔押金具打^{きんぱくおしかなぐうち}としている。窓は、3階だけでなく2階においても花頭窓^{かとうまど}黒漆塗としている。

紙本金地著色風俗図（彦根屏風） 【国宝・絵画】

江戸時代に代々彦根藩主であった井伊家に伝わったため『彦根屏風』の名があり、江戸時代寛永（1624年～1644年）期の風俗図の代表的な名作である。

本図の筆者は不明であるが、狩野派の画風を示し、構図の妙、精緻を極めた筆致^{ひつち}から、当時の狩野派屈指の絵師の作と判断される。



紙本金地著色風俗図（彦根城博物館蔵）

彦根城太鼓門及び続櫓 【重要文化財・建造物】

彦根城太鼓門及び続櫓は、鐘の丸から登る道筋の天守を前にした最後の城門である。その門櫓の下は、太鼓丸があり天秤櫓へと続いている。太鼓門の続櫓からは、太鼓丸および天秤櫓を見渡す防御施設であるとともに本丸側の壁面は、開放され、柱間に高欄こうらんを付して1間通りを廊下としており、櫓にはたいへん稀な例であり、全国の近世城郭でこのような構造の櫓は他に例がない。



彦根城太鼓門及び続櫓

重要文化財となっている櫓は、天秤櫓・西の丸三重櫓そして天守などと同様に、築城時にほかの場所から移築された建造物である。太鼓門及び続櫓の建立年代は、慶長8年(1603年)から慶長11年(1606年)にかけて営まれたものと推測される。

彦根城天秤櫓 【重要文化財・建造物】

彦根城天秤櫓は、大手門と表門からの道が合流する要の位置に築かれた櫓である。天秤櫓の下は、鐘の丸から本丸へと伸びていた尾根を、築城時の縄張りによって大きく断ち切った堀切となっている。鐘の丸と天秤櫓は堀切ほりきりにより橋がなければ本丸へ進めないため、戦の際天秤櫓の果たす役割は重要である。



彦根城天秤櫓

重要文化財となっている櫓は、両隅に2階建ての櫓を設けて中央に門が開く構造で、均整のとれた美しさに加え、城内の要の城門として重要な構成要素である。天秤櫓の建築は、慶長9年(1604年)から慶長11年(1606年)にかけて営まれた。

彦根城西の丸三重櫓及び続櫓 【重要文化財・建造物】

彦根城西の丸三重櫓及び続櫓は、本丸の隣接する西の丸の西北隅に位置しており、さらに西に張り出した出曲輪との間に設けられた深い堀切に面して築かれている。西の丸三重櫓及び続櫓を堀切の底から見上げると絶壁のようにそそり立ち、西の搦め手方面からの敵に備えた守りの要でもある。



彦根城西の丸三重櫓及び続櫓

重要文化財となっている櫓は、東側と北側にそれぞれ1階の続櫓を「く」の字に配置し、この櫓の接点に三重櫓を配しており、浅井長政の居城・小谷城おだにじょうの建物を移築されたものと伝えられてきた。

しかし、昭和35年(1960年)より解体修理が行われたが、解体調査によってもこれを裏付ける資料は得られていない。また、建立年代についても資料に乏しく明らかにならなかったが、本丸に連なる主要郭として、慶長年間には既に完成していたと考えられている。

彦根城二の丸佐和口多聞櫓 【重要文化財・建造物】

彦根城二の丸佐和口多聞櫓は、内堀と中堀の間の第2郭（二の丸）に位置し、彦根城の中堀に開く4つの門の1つで、内堀の表門に通じる入口として、大手の京橋口門とともに重要な城門であった。櫓は、二重櫓と多聞櫓で構成され、佐和口の枡形を中央に配し、両翼に伸びる長大な櫓であった。現在は、左翼に伸びる櫓のみが江戸時代以来の姿を留め、重要文化財に指定されている。



彦根城二の丸佐和口多聞櫓

重要文化財となっている櫓は、左端の二重櫓とそれに続く多聞櫓からなり、佐和口の枡形を囲むように二度曲折する長屋となっている。この櫓の内部は7つに区画され、中堀側のみ二重壁とし窓を設けるとともに、三角と四角の狭間を交互に配置している。現存する彦根城の櫓の中では、もっとも規模の大きな櫓である。佐和口多聞櫓は、彦根城完成前の元和8年（1622年）までに建てられていたと考えられる。明和4年（1767年）に火災で類焼し、現在の建物は明和6年（1769年）から8年（1771年）にかけて再建されたものである。

彦根城馬屋 【重要文化財・建造物】

馬屋は、特別史跡彦根城跡の東南東、表門の外、内堀と道路を隔てて建ち、その敷地の奥には重要文化財二の丸佐和口多聞櫓と隣接している。この馬屋は、L字形に建てられ、藩主などの馬21頭が繋がれていたとされ、全国の近世城郭に残る大規模な馬屋として例がない。



彦根城馬屋

重要文化財となっている馬屋の建築年代は、明らかになっていない。しかし、明和4年（1767年）に二の丸佐和口多聞櫓が焼失した際、これに近い馬屋の東西棟の東寄りが罹災し、罹災した部分は佐和口多聞櫓の再建が行われた明和6年（1769年）から8年（1771年）にかけて修復が行われた。

千代神社本殿 【重要文化財・建造物】

もともと佐和山城下の麓の姫袋（現古沢町）に鎮座していた社を、天正13年（1585年）に彦根山東麓の尾末（現尾末町）に遷し、さらに慶長6年（1601年）に井伊直孝によって再び元の鎮座地である姫袋に遷され社殿の造営が始められた。社殿が完成したのは寛永15年（1638年）で、このとき造営された三間社流造の本殿は、昭和41年（1966年）に現在地（京町二丁目）に移築された。当地では数少ない近世初期の遺例であり、現在では、祭神が天宇受売命ということで、芸能の神様としても信仰されている。



千代神社本殿

ちょうじゆいんべんざいてんどう

長寿院弁才天堂附棟札1枚 【重要文化財・建造物】

大洞弁財天で有名な長寿院は、元禄9年（1696年）に井伊家4代井伊直興により建立された。日光東照宮を修造した大工を使って建てられたと伝わる。寺院建築としては、稀な権現造りの社殿は彦根日光とも呼ばれ、ここに参詣すれば百所を詣でた功德があるといわれる。



長寿院弁才天堂

ありかわ

有川家住宅 【重要文化財・建造物】

有川家住宅は、中山道の鳥居本宿に所在し、江戸時代に妙薬として広く知られた「赤玉神教丸」を製造販売する薬店の本店である。敷地内には、宝暦9年（1759年）の主屋、同12年（1762年）の粉挽蔵、寛政7年（1795年）の文庫蔵、文化5年（1808年）の書院、同7年（1810年）の薬医門、同12年（1815年）の大蔵が残り、近世の屋敷構えを伝える貴重な町家建築である。



有川家住宅

彦根城跡 【特別史跡】

慶長9年（1604年）に築城が開始され、およそ20年かけて完成した近世城郭である。かつての彦根城は、三重の堀・人工河川（現芹川）や城下町を含む大城郭であった。その中で、中堀より内側の範囲は、石垣で構成された城郭平面構造が極めて良好な形で残っていることから昭和26年（1951年）に国の「史跡」、同31年（1956年）には「特別史跡」に指定された。



彦根城跡

また、彦根城の南東隅に相当する外堀土塁については遺構確認調査を実施し、極めて良好な形で地上面にその姿を残していることから、平成28年（2016年）3月に特別史跡彦根城跡に飛び地で追加指定された。

彦根藩主井伊家墓所 【史跡】

彦根藩主井伊家墓所は、江戸時代、彦根藩30万石を領した井伊家歴代の墓所である。

井伊家の墓所は、国許彦根の墓所として滋賀県彦根市所在の曹洞宗清凉寺、江戸表の墓所とし東京都世田谷区に所在する曹洞宗豪徳寺が設けられ、歴代藩主以下、正室・側室、子息・子女など井伊家一族が葬られた。



彦根藩主井伊家墓所

また、滋賀県東近江市所在の臨濟宗永源寺に、4代直興とその側室の墓所が営まれた。

清凉寺は、彦根城下町の東郊、佐和山の麓にある。慶長7年(1602年)、直政の死去により墓所として創建され、寛永年間(1624年～1644年)に直孝が愚明正察を招じて開山とし、次第に整えられた。墓所は、境内の最奥、本堂裏手の佐和山麓に所在する。山麓を石垣で段状に整え、手前に初代直政、3代直澄、5代直通、7代直惟、8代直定、11代直中、12代直亮の歴代7藩主の墓石を連れ、その南側と奥一带に正室・側室など15基、子息・子女33基などが連なっている。墓石の形状は、藩主の7基をはじめ17基が無縫塔型で、方柱型が37基、五輪塔型が3基、舟型が1基である。これらの墓石は、往時には白漆喰の瓦塀や柵などで区画され、霊屋で保護されるなど整然としたものであった。また、墓所内にはかつて経蔵と直政、直孝の霊を祀るため、直中が建立した護国殿があった。ともに建物基礎は残るが、建物自体は近代以降移築され、護国殿は福井県敦賀市、経蔵は埼玉県所沢市に現存する。

荒神山古墳 【史跡】

荒神山古墳は、本市の西方、琵琶湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山(標高284.5m)の山頂から、北へ約150m下った尾根頂部に位置する。市教育委員会では、平成15年度(2003年度)～平成19年度(2007年度)にかけて4度にわたり、古墳の範囲確認を目的とする発掘調査を実施し、調査の結果、荒神山古墳が全長124mを測る前方後円墳であること、築造時期は古墳時代前期末(4世紀末)であること、墳丘は葺石で覆われ、前方部・後円部とも3段に築かれていること、各段のテラスには埴輪が巡っていたことなど、重要な発見が相次ぎ、平成23年(2011年)2月に国の史跡指定を受けた。



荒神山古墳 葺石

墳丘の築造方法としては、尾根を整形して基底部とし、その上に前方部・後円部ともに2段のテラスと墳頂平坦面を設けた、「3段築成」を採用しており、基底部は標高262m～264mで、その上約4mに1段目のテラスを、さらに約3m上に2段目テラス、そして墳頂平坦面を設けている。後円部の2段目テラスと墳頂平坦面の比高差は8.5mと際立っているが、多量の土砂が崩落していることを考えると、築造当初の後円部墳頂はさらに高かったと考えられる。この3段築成に加えて、埴輪を巡らせて葺石で覆うなど、大和中枢部に築造されたものと同じの様式を持つことから、大和とも深いつながりのある首長墳であることが明らかとなった。

旧彦根藩松原下屋敷（お浜御殿）庭園 【名勝】

松原下屋敷（お浜御殿）は、井伊家11代当主直中により文化7年（1810年）に琵琶湖岸に造営された下屋敷である。江戸時代の史料には、「松原御下屋敷」という文字で見ることができる。

この下屋敷は、外堀の外側の豊かな自然環境の中で、藩主が政務を離れてくつろぐことができる空間として利用された。庭園は、大名庭園の様式を良く示しており、中央に設けられた池泉を中心に要所に架けられた橋を渡って、庭園内を散策できるように造られており、回遊性に富んだものとなっていた。その回遊の中で休憩ができるように園内西側の築山上には、四阿が建てられていたことが天保15年（1844年）の『松原下屋敷庭園絵図』（彦根城博物館所蔵）から窺える。

庭園全体の構成としては、今は無い書院の北方前面に庭園が広がるように造られており、手前を洲浜とし、北方対岸は築山が低くおさえられた穏やかな景観、東側には連続して築山が築かれた深淵な景観となっている。また、本名勝庭園の最大の特徴は、池泉が琵琶湖及びかつて東側に存在した松原内湖と水路を介して繋がっていたという点であり、このことで、池泉を満たす水は、琵琶湖および松原内湖で生じる水位の差によって給排水されることとなる。このように、周囲の水面と連動して汀線が変化させることを「汐入」と呼ぶ。

明治4年（1871年）の廃藩置県後、井伊家は東京に本宅を構えるが、この下屋敷は「千松館」と呼称を変え、彦根における井伊家の居宅はこの屋敷が用いられる。

井伊家当主は、彦根で行事が開催される際には、この千松館に帰館し、明治22年（1889年）には、玄関棟や大広間棟が増設されるなど手が加えられ、昭和22年（1947年）には井伊家が東京から彦根に移住し本宅となった。



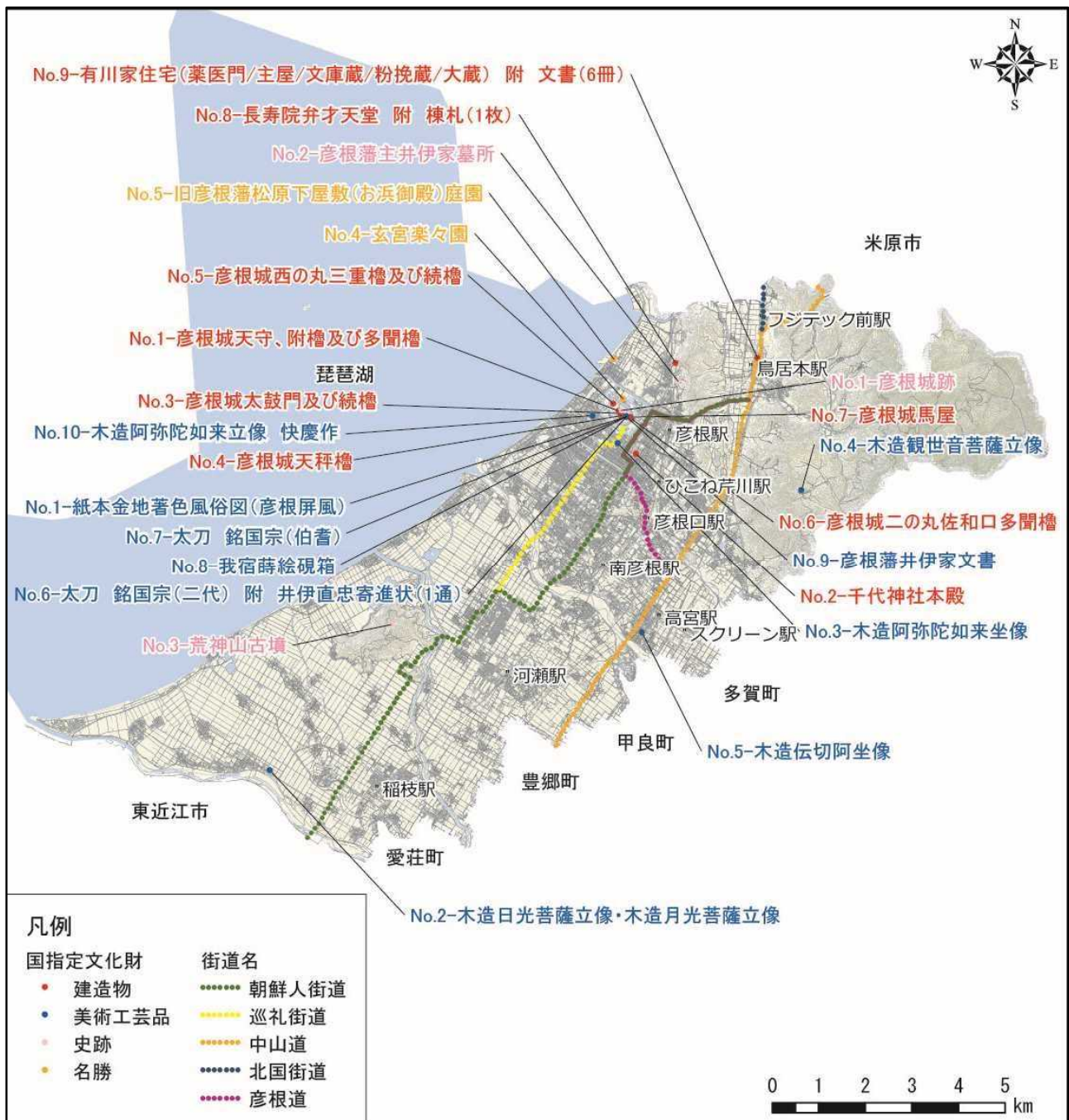
戦前のお浜御殿絵図（彦根城博物館蔵）に加筆



昭和35年以前のようす



昭和30年頃の千松館



国指定文化財（建造物、史跡、名勝、美術工芸品）の分布（令和2年2月現在）

（2）重要伝統的建造物群保存地区

彦根のかつての城下町範囲の東には、江戸時代前期に河川を付け替えて形成された城下町の特徴ある町割りを良く伝えるとともに、街路に沿って江戸時代から昭和戦前期にかけて建てられた町家などを良く残し、商家町としての歴史的風致を良く示すことから、平成28年(2016年)7月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された「彦根市河原町芹町地区伝統的建造物群保存地区」がある。

本保存地区は、旧城下町の南東隅に形成されたかつての町人地で、一部に寺地を含む。城下町と中山道、さらには東方の農村部および山間部を結ぶ芹川北岸の往来に沿ったまちなみで、北から江戸時代の河原町、袋町、安清町、善利新町の東西約470m、南北約620m、面積約5.0haの範囲である。

彦根の城下町は、元和期(1615年～1624年)に三重の堀を巡らす城下の骨格が定まり、寛永期(1624年～1644年)にかけて城下町も整備されるが、河原町は元和4年(1618年)以前、南端の善利新町も寛永18年(1641年)には成立したとされる。17世紀末期には、米、油、菓子などの生活消費財を商う小売りが多く、中でも煙草屋が多数を占めていたが、幕末期には様々な職種が見られるようになった。

本保存地区では、ゆるやかにS字を描く幅2間程度の往来に沿って、所々に不整形の敷地を見せながら、短冊形に割られた敷地が並び、芹川の流路を付け替えて整備した城下町の町割りを良く残す。

敷地前面には、主屋を置く。主屋は、切妻造り、瓦葺き、2階建を基本とする。2階を厨子2階(中2階)として虫籠窓を備え、屋根背面は深く葺き降ろす。間取りは、片側を土間とし、1列もしくは2列に部屋を並べ、古い形式を残すものは、みせの間の土間境の建具を雨戸仕舞とする。正面1階の柱筋を、2階より半間出した下屋形式とするものが多く、2階の軒は出桁造りとし、年代の古いものは、2階を壁、軒裏ともに塗り込める。袖うだつを設けるものもある。敷地背面には、土蔵を置く。

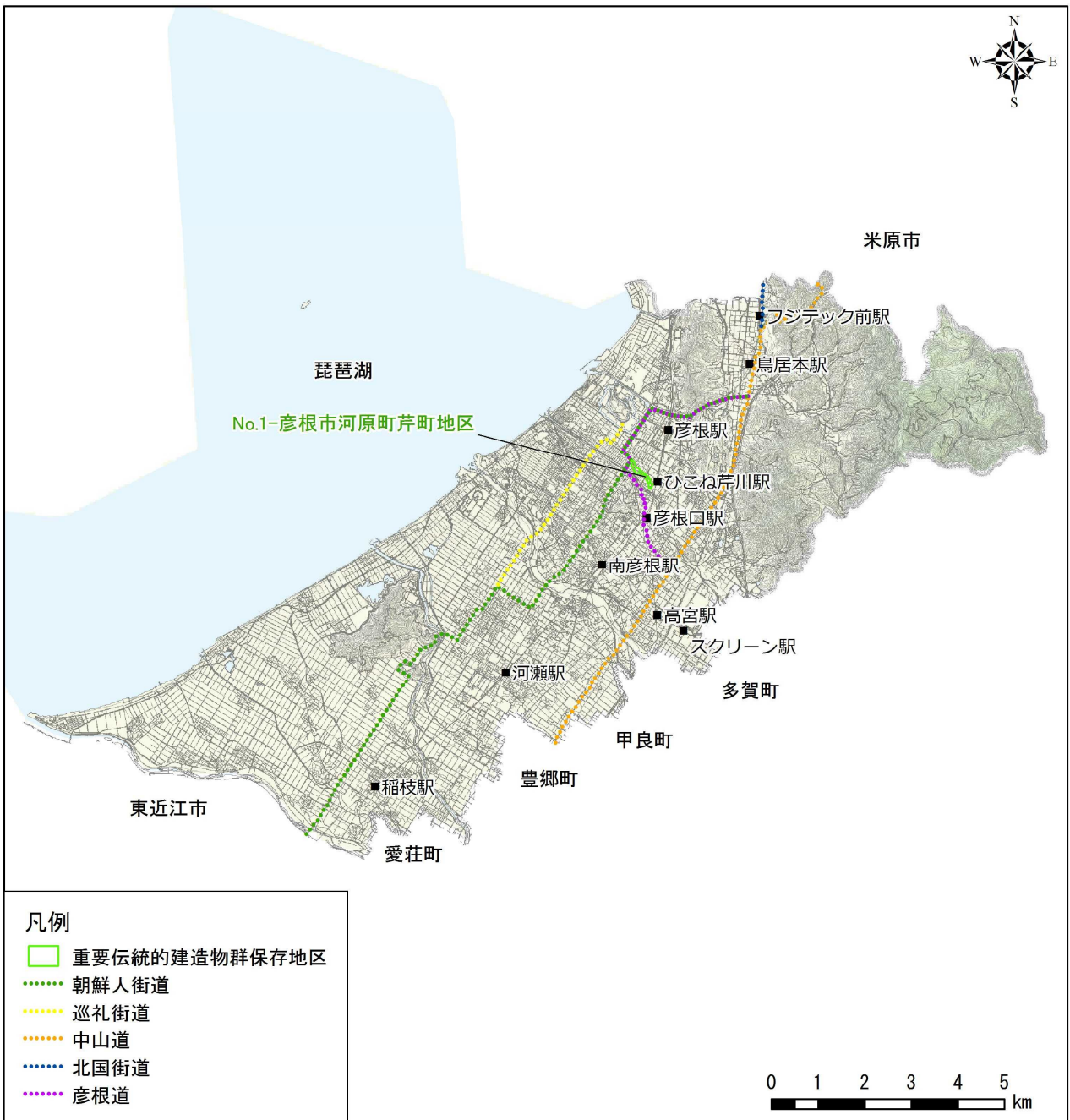
地区西部には、銀行などの近代建築や、表構えを洋風に改造した町家が残り、近代以降も商業地として栄えた様相を伝えている。



保存地区の伝統的な町家
虫籠窓やそで壁を持つ古い形式の町家

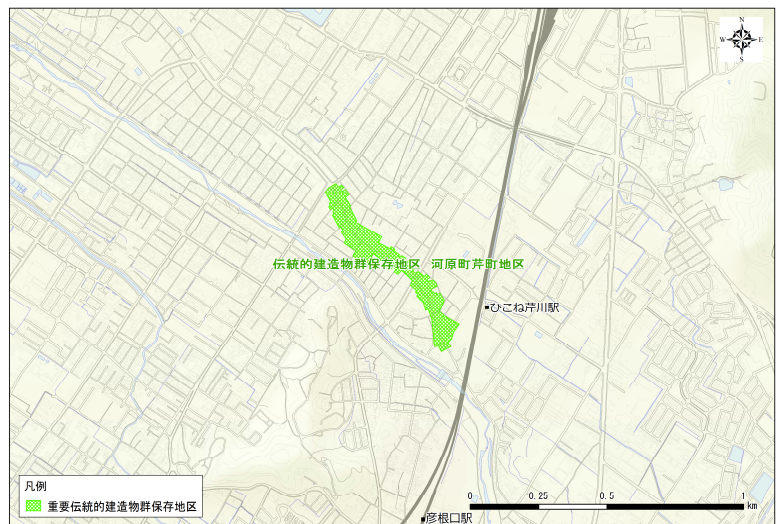


芹町(旧善利新町)のまちなみ
厨子二階の伝統的な町家が連なる



重要伝統的建造物群保存地区の分布（令和2年2月現在）

重要伝統的建造物群保存地区の位置図（彦根市河原町芹町地区）



（3）登録有形文化財建造物

国登録有形文化財建造物は、56件（55棟1基）あり、その内訳は建造物48棟、その他工作物7棟および1基となっている。

旧日夏村役場産業組合合同庁舎【登録有形文化財建造物】

旧日夏村役場の建物は、街道沿いに正面入口（西側）を設けた木造2階建モルタルの洋館で、東側に両翼が出た外観にも特徴がある。昭和9年（1934年）ヴォーリズ建築事務所が日夏村役場及び産業組合の合同庁舎として設計し、6月15日地鎮祭を執行、昭和10年（1935年）4月19日落成式を挙行し、近年昭和9年（1934年）9月7日の棟札も発見された。



旧日夏村役場産業組合合同庁舎

近江鉄道鳥居本駅舎【登録有形文化財建造物】

駅舎は、昭和6年（1931年）の近江鉄道彦根線開通に際して設置された。近江鉄道彦根線は、鳥居本の住人に乞われて開通されたもので、旅客利用はもちろん貨物としても利用された。

鳥居本駅は、鳥居本の交通・物流の拠点であり、鳥居本の近代の表玄関ともいえるべき建造物であった。



近江鉄道鳥居本駅舎

スミス記念堂（旧須美壽記念禮拜堂）【登録有形文化財建造物】

スミス記念堂は、アメリカ人で日本聖公会彦根聖愛教会の牧師であり彦根高等商業学校の英語教師でもあったパーシー・アルメリン・スミス氏が、両親を記念し、多額の^{きょきん}醸金（お金）を募って建設した昭和6年（1931年）建立の和風礼拝堂である。

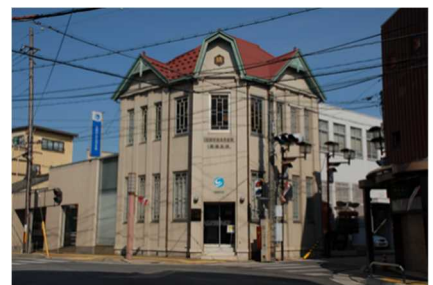
建築資材には、良質な吉野の^{ひのき}檜材を用いており、伝統的な寺社建築を基本としつつも、要所に十字架や^{ぶどう}葡萄などキリスト教ゆかりの文様を彫刻などの手法で取り込んでいる。



スミス記念堂（旧須美壽記念禮拜堂）

滋賀中央信用金庫銀座支店店舗【登録有形文化財建造物】

滋賀中央信用金庫彦根支店の建物は、「久佐の辻」とよばれる市内でももっとも栄えた繁華街交差点の東北角に位置する洋風建築である。当建物は、もともと明治銀行彦根支店として、大正7年（1918年）に建てられた。棟札によれば「工事請負人」は、杉江太平であった。昭和7年（1932年）に明治銀行が破綻してからは、病院として使われた時期もあったというが、昭



滋賀中央信用金庫銀座支店店舗

和33年（1958年）に彦根信用金庫が購入し、河原町支店（後に銀座支店）とした。

宇水理髪館店舗 【登録有形文化財建造物】

宇水理髪館は、昭和11年（1936年）に先代が建築したもので、昭和初期の近代建築として貴重な存在である。この建物は、切妻造り、^{きりづま} 棧瓦葺き、^{さんがわらぶ} 平入りで、表側は両端の柱がアーチを支えているようなモダンな外観となっている。また、アーチのキーストーンはバリカン、両端の柱の先端にはアカンサスの葉、外壁上部にはコーニス（^{のきじゃばら} 軒蛇腹）を模したような装飾がそれぞれあり、細部にもこだわった様子が見えてくる。



宇水理髪館店舗

高崎家住宅主屋（旧川原町郵便局舎） 【登録有形文化財建造物】

高崎家住宅は、江戸時代から表具屋を営んでおり、江戸後期の文書も伝えられている。建物は、昭和9年（1934年）に現在の様式に改造され、町家部分と局舎部分に分かれている。切妻造り、棧瓦葺き、平入りで間口5間半、奥行6間の町家を改造し、局舎部分を附設したため、向かって右側にももとの町家が残る。左側は軒蛇腹をめぐらせ、縦長の窓に木製の窓枠を付け、タイル張りとした洋風な郵便局舎に改造されている。



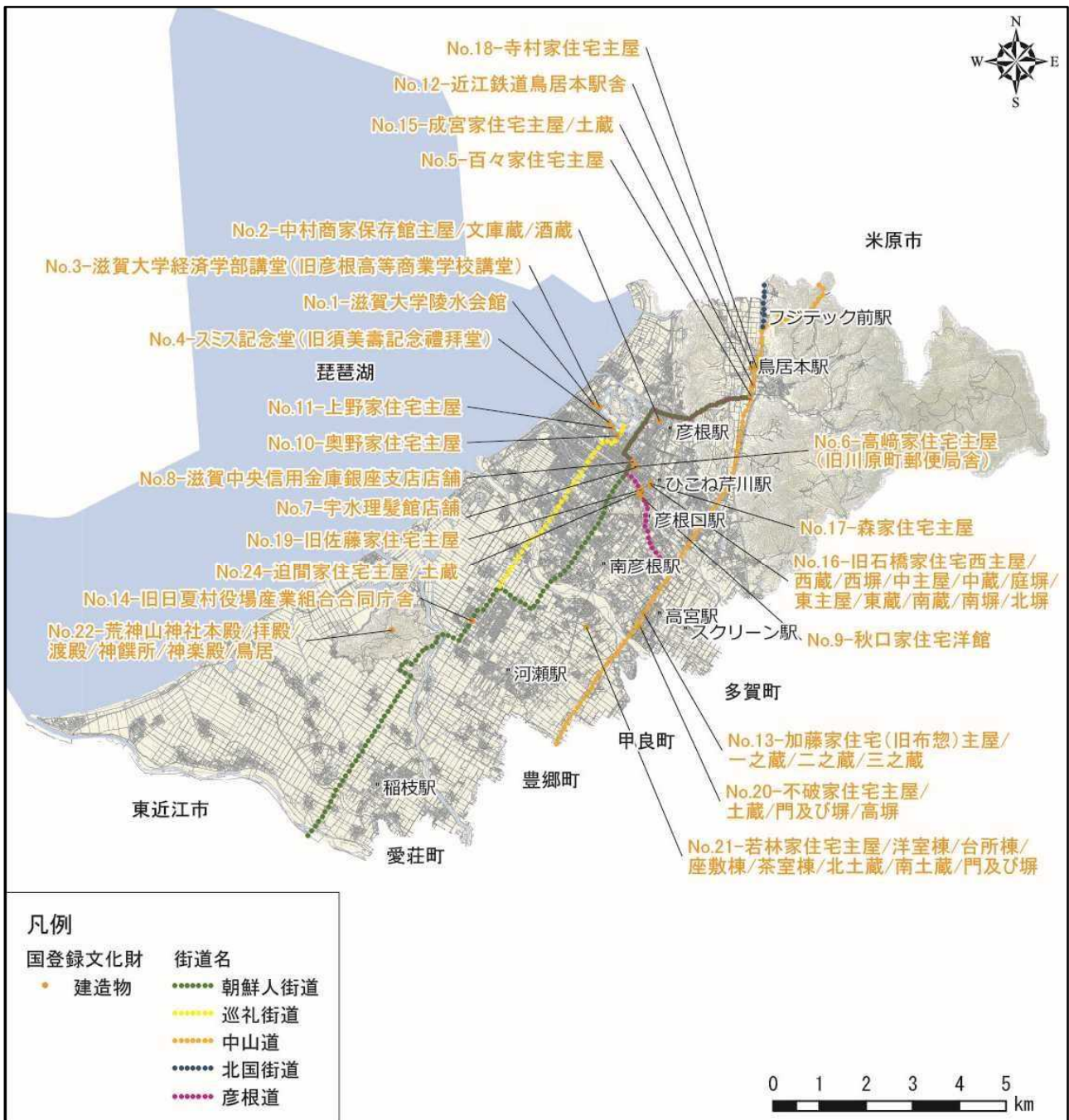
高崎家住宅主屋（旧川原町郵便局舎）

若林家住宅 【登録有形文化財建造物】

若林家住宅は、およそ850坪の敷地をもち、ほぼ北側に通る前面道路に門戸を開いている。建物は昭和3年（1928年）に移築され、木造2階建ての日本瓦葺きの主屋棟を中心に、木造2階建ての洋室棟、木造平屋建ての座敷棟、茶室棟、そして宅地の北東部に2棟の土蔵などがあり、総延べ床面積およそ597㎡（180坪）を有している。そうした建物は、建設当時の状態を良く留めており、特色ある洋室部を付設する近代和風邸宅遺産となっている。加えて玄関に至る前庭、敷地南東部には広い池泉庭園、そして道路に面する長大な屋敷塀を回すなど和風邸宅の構えを良く保持している。



若林家住宅洋室棟



登録有形文化財建造物の分布（令和2年2月現在）

（4）県指定文化財

滋賀県指定文化財は、13件ある。その内訳は、建造物4件、絵画1件、彫刻3件、工芸品2件、古文書1件、史跡1件、名勝1件である。工芸品として「彦根藩井伊家伝来具足^{でんらいぐそく}」、史跡には、江戸時代末に彦根藩の産業でもあった「湖東焼窯場跡^{ことうやきかまぼあと}」がある。

主な県指定文化財

長久寺本堂（観音堂） 【建造物】

長久寺は長久3年(1042年)高野山の学僧善応僧都が開創したと伝え、本尊に千手観音をまつる。本堂（観音堂）は、高欄の擬宝珠に寛永6年(1629年)の刻銘があり、この時代に建立されたと考えられる。建物は、小堂ながらも均整がとれ、妻飾り、斗供、臺股などの意匠には桃山時代のなごりをとどめ、江戸時代初期の特色を示す三間仏堂の好例とされている。



長久寺本堂（観音堂）

多賀大社鳥居（一の鳥居） 【その他工作物】

高宮町の旧中山道沿いに立つ大きな鳥居で、多賀大社から西方約4kmの表参道に面して位置し、県下の石造鳥居としては古式で最大のものである。鳥居は、明神鳥居形式で、柱と柱の間約8m、高さ約11m、柱の直径は1.2mである。鳥居は、寛永12年(1635年)の建立で、社殿が元和元年(1615年)の火災の後、寛永年間(1624年～1643年)に造営されており、鳥居はこの時に建立されたと考えられる。



多賀大社鳥居（一の鳥居）

湖東焼窯場跡 【史跡】

湖東焼は、文政12年(1829年)に城下の商人絹屋半兵衛たちにより始められ、井伊家12代当主直亮の時に彦根藩の御用窯となった。

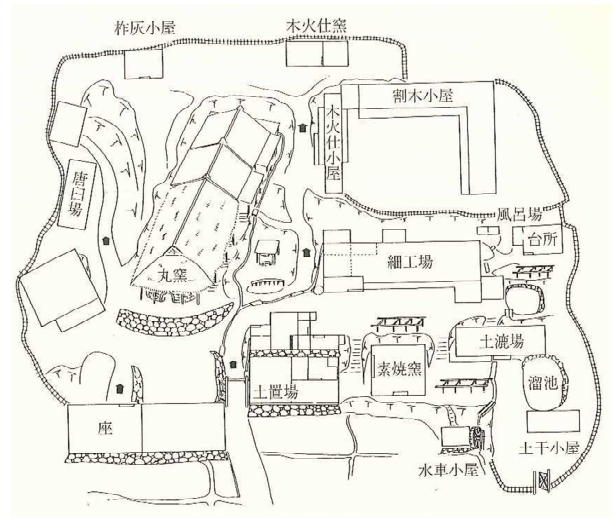
窯場は、当初芹川左岸の晒山に築かれたが、翌年には餅木谷の当所に移築された。藩窯化以降、窯場は整備され直弼の時代に黄金期を迎え、高級品生産が定着するとともに、製品銘も「湖東」の二字に統一された。

しかし、桜田門外の変(安政7年(1860年))以後は藩が苦境に立ち、その2年後の直憲の代に藩窯としての歴史を閉じ、その後は山口喜平により民窯として明治28年(1895年)まで細々と存続した。焼物は、磁器を中心に染付、金襴手、赤絵、

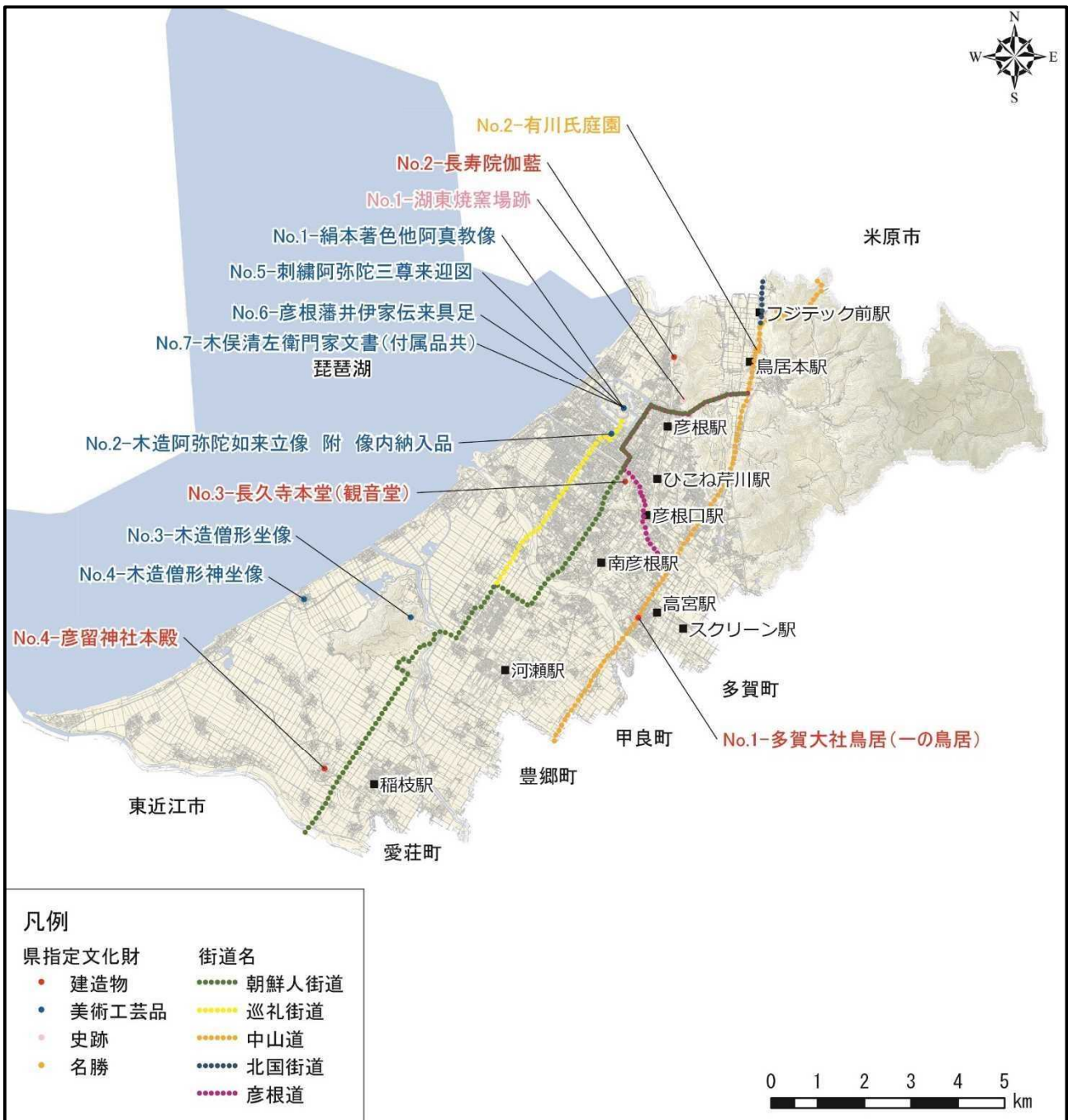


安政2年(1855年)の湖東焼窯場

せいじ
青磁など細やかで美しい製品を世に送り出して
いる。窯跡は、連房式登窯で、他に工房跡・素
れんほうしきのぼりがま
焼窯跡などが良好に残り、近世産業史の中で藩
はん
窯の实態を示すものとして貴重な遺構である。



湖東焼窯場跡



県指定文化財の分布（令和5年3月現在）

（5）市指定文化財

市指定文化財は、90件ある。その内訳は、建造物33件、史跡2件、名勝2件、天然記念物2件、無形民俗文化財4件、その他絵画などの美術工芸品47件が存在する。

このうち24件は、いずれも旧城下町を構成した江戸時代の歴史的建造物である。1棟が藩校弘道館（現金亀会館）の講堂であった建物。1棟が表御殿の能舞台。19棟が武家屋敷。残る3棟は町家の建造物である。表御殿の能舞台と1棟の上級武家屋敷長屋門が特別史跡内である他は、旧城下町に散在して江戸時代の城下の面影を今に伝えている。

主な市指定文化財

彦根城表御殿能舞台【建造物】

江戸幕府は、能を武家の式楽とし、江戸城本丸の表舞台を頂点に、格式によって能舞台の様式を定めた。表御殿の能舞台は、寛政12年（1800年）に井伊家11代当主直中により、この規範に則して建立された江戸時代の公式の能舞台であり、現在では、ほとんど残っていない大名家の能舞台としては建築史的にも芸能史的にも貴重である。



彦根城表御殿能舞台

この能舞台は、明治時代に表御殿が取り壊された後に、井伊神社境内、沙々那美神社（現護国神社）境内へと移築されたが、彦根城博物館建設時に表御殿内のもとの場所に戻された。

金亀会館【建造物】

金亀会館は、江戸時代には彦根藩の藩校の講堂であった歴史的建造物である。江戸時代、特に後半以降になると、各藩とも藩士の文武奨励のため藩校設立の気運が盛り上がり、各地で藩校が建設された。彦根藩でも寛政6年（1794年）に井伊家11代当主直中の下で藩校設立が決議され、同9年（1797年）には、城下第2郭西端の地（現在の西中学校運動場辺り）に起工、同11年（1799年）藩校稽古館として開校した。稽古館開校から31年を経た天保元年（1830年）、井伊家12代当主直亮は、藩校の名称を弘道館に改めるとともに洋学を講義に取り込むなど藩校の改革を実施。明治4年（1871年）の廃藩置県により廃止されるまで弘道館での教育は、多大な成果をあげた。



金亀会館

現在、中央町に残る金亀会館は、藩校の講堂を大正12年（1923年）に当地に移築し、西本願寺の教堂として使用してきたものであり、藩校唯一の現存建物として貴重である。

きゅうさいごうやしき

旧西郷屋敷長屋門 【建造物】

現在この長屋門が建っているところは、天保7年（1836年）の『彦根御城下惣絵図』によれば、家老・西郷伊予の屋敷にあたる。この長屋門は、寛保2年（1742年）に西隣の庵原家いほらで建てられたものを、明治16年（1883年）に裁判所が整備されることに伴い現在の場所に移されたとされ、市内に残る長屋門の中でもっとも大きいものである。



旧西郷屋敷長屋門

きゅういけだやしき

旧池田屋敷長屋門 【建造物】

旧池田屋敷長屋門は、特別史跡彦根城跡の東、尾末町に位置し、この辺りは中堀と外堀に囲まれた第3郭の東の端にあたり、江戸時代には、中級武家屋敷が建ち並んでいた。かつての屋敷地は、間口17間余（約34m）、奥行10間（約20m）あったが、現在は主屋などが取り壊され、長屋門のみ現存している。長屋門は、桁行10間（約20m）、梁間2間（約4m）の入母屋造りで、正面左端に門が設けられ、門の右手には「中間



旧池田屋敷長屋門

（武家奉公人）部屋」や「馬屋」などの長屋が5室連なっている。彦根藩では、分限ぶんげん（身分）に応じて長屋門の格式が定められていたようであるが、この建物は彦根藩の中級武家屋敷の典型をなす長屋門として貴重である。

旧鈴木屋敷長屋門 【建造物】

旧鈴木屋敷は、天保7年（1836年）の『彦根御城下惣絵図』によれば、鈴木権十郎ごんじゅうろうの屋敷にあたる。鈴木権十郎は、禄高350石で大津蔵奉行ろくたかであった。

長屋門は、正面より右に偏して門を設け、左には小部屋を連ねている。上半を白漆喰壁、腰より下を下見板張りとし、要所に格子窓を設けている。棟東に文久2年（1862年）の墨書むなづかがあり、幕末期の彦根藩中級武家屋敷の典型をなす長屋門である。



旧鈴木屋敷長屋門

旧彦根藩足輕組辻番所、旧磯島家住宅 【建造物】

善利組・旧磯島家住宅は、旧芹橋12丁目の中央、中辻通りなかつじどおと交差する北西隅に位置し、その前庭の南端には、見張り窓を設けた辻番所と称する建造物が存在する。見張り窓は2方向の通りに面して2箇所なかつじどおに設けられており、見通しが良いように番所が通りに若干張り出している。主屋を経由することなく通りから直接番所に入るようになっており、通りの辻の要所に番所を配して、城下への人の出入りを監視していたと考えられる。この辻番所は、現存する唯一の辻番所の施設として貴重である。



旧彦根藩足輕組辻番所、旧磯島家住宅

旧彦根藩足輕組屋敷（善利組・中居家住宅）【建造物】

足輕屋敷の形態を良く残し、城下町の歴史的景観を先導する建物である。主屋は、間口5間、奥行5間半の切妻造り・棧瓦葺きの中2階形式で通りに面して妻面を見せ、表に向かって下屋をかける。主屋の表側にどまを設けて台所などとし、次にいまと玄関、ざしきなどを設け、前土間型の整形四間取りに近い平面形態をとっている。



旧彦根藩足輕組屋敷（善利組・中居家住宅）

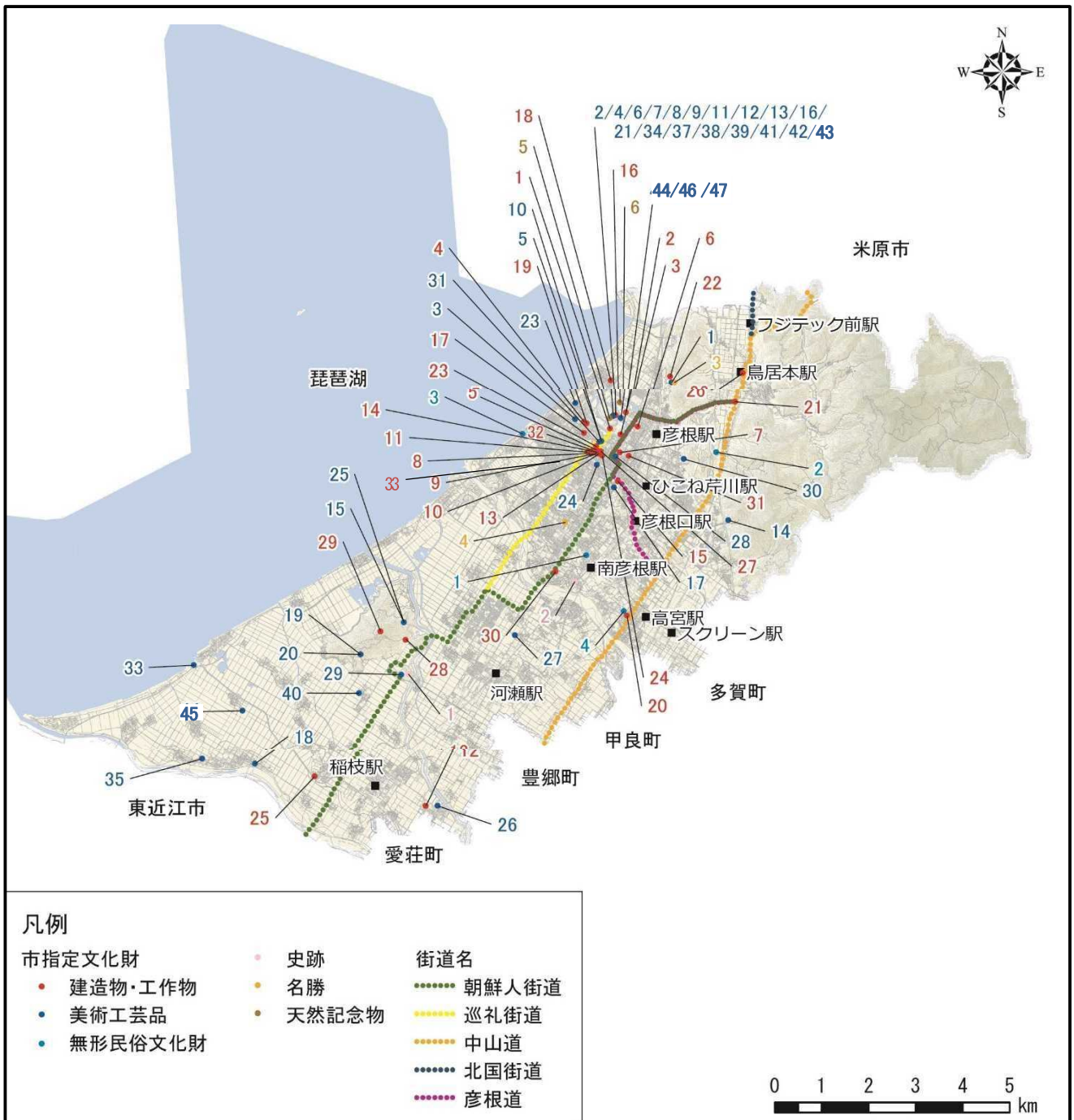
旧広田家（納屋七）住宅 【建造物】

旧広田家住宅は、江戸時代に魚屋が集中して居住していた旧下魚屋町の西端にあり、魚問屋にふさわしい重厚な構えを残している。屋号を「納屋」といった。

主屋は、桁行7間半、梁間7間の切妻平入りの建物である。前面庇、壁、軒周りは漆喰で塗りこめており、軒の出桁は梁の端部を腕木状にはねだして受けている。建築年代は、背面突出部の鬼瓦に安永7年（1778年）の刻銘があることから、そのころに建築されたと推測される。「納屋七」は、納屋七右衛門の略。



旧広田家（納屋七）住宅



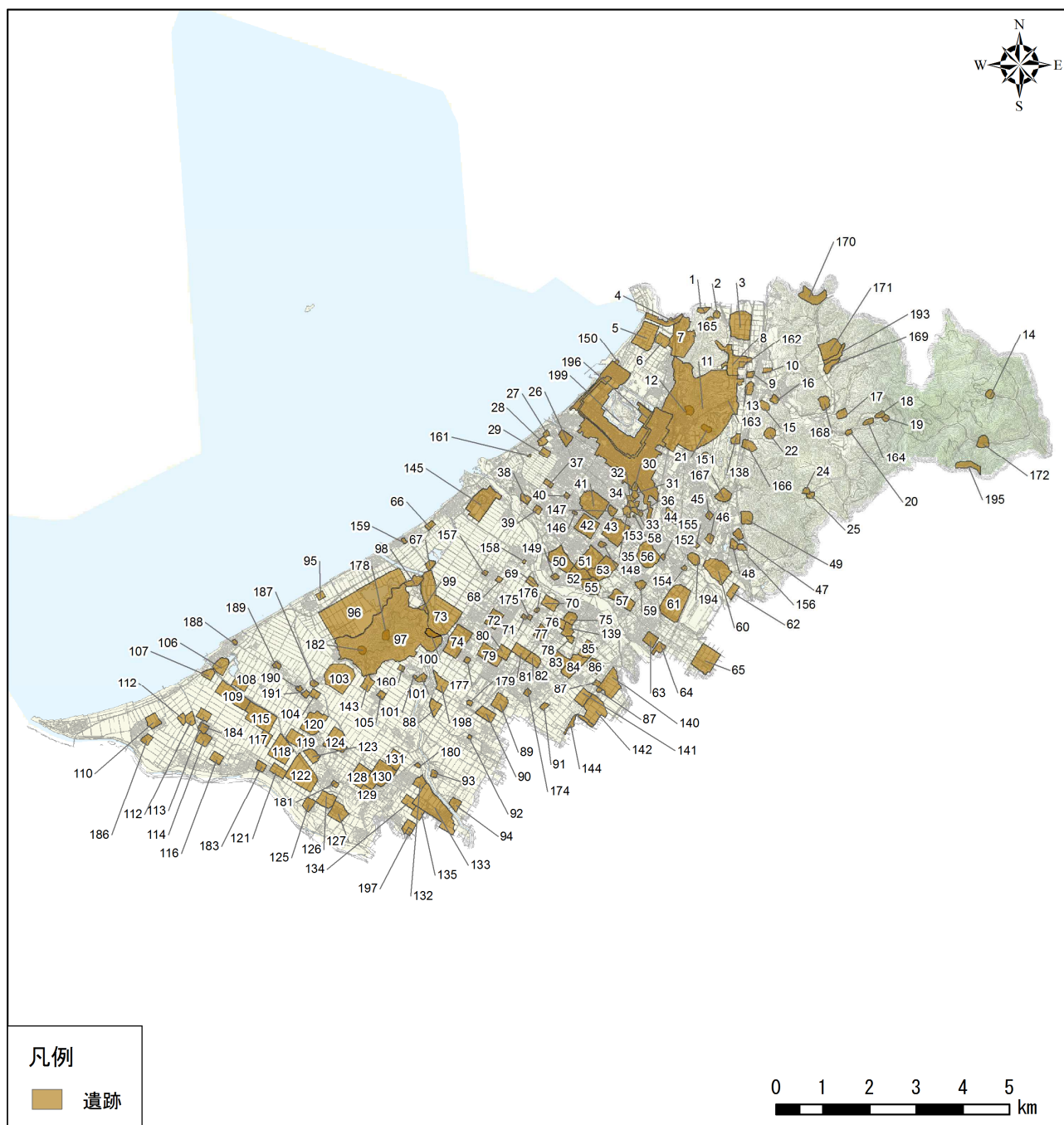
市指定文化財の分布 (令和8年3月現在)

※番号は「資料編」参照

（6）周知の埋蔵文化財包蔵地

市内には、縄文時代から近世に至る 200 件の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する。

この中で、特に弥生時代後期から古墳時代初頭を中心時期とする稲部遺跡、稲部西遺跡については、祭祀に関する大型の掘立柱建物や首長居館と考えられる溝で*ほったてぼしら* 圍繞された掘立柱建物、金属器製品の生産遺構、多数の竪穴住居が集中して確認されている。また、佐和山城跡においては、良好に残る城郭関連の遺構と城下町の遺構、内堀の遺構が確認されている。これら2つの包蔵地については、ともに道路敷設に伴う発掘調査において遺構が確認されており、稲部遺跡、稲部西遺跡については、道路法線を変更することで遺構保存が実現できた。



※番号は「資料編」参照

彦根市遺跡地図（周知の埋蔵文化財包蔵地）

（7）伝統芸能、伝統工芸

彦根には、江戸時代以来の伝統を引き継ぐ茶の湯や能楽が、今も豊かに根付いている。

「茶の湯」

茶の湯は、町方の千家茶道とともに、武家茶道としての石州流が藩主井伊家をはじめ家臣たちの間に広く普及した。井伊家では、伝来した茶道具や記録から、歴代当主が茶の湯を嗜んだことが推測され、茶会への参席の記録も残っている。古くから「御茶道役」という役職も確認できる。中でも、井伊家11代当主直中は文化10年(1813年)5月に彦根に戻る際、下屋敷の槻御殿に茶室や能舞台を設けた人物として知られる。



名勝玄宮楽々園でのお茶会

12代当主直亮もまた、江戸や彦根の屋敷に茶室や待合を設けて茶の湯に精進した。そして13代直弼は、近年、幕末を代表する茶人とまで評されている。彼の著した『茶湯一会集』には、「一期一会」「独坐観念」といった茶の湯の真髓が説かれている。また、直弼は17人の弟子を持った茶の湯の宗匠でもあった。17人はいずれも彦根藩士。藩主の影響などもあって、石州流を嗜む家臣は多かった。こうした石州流の道統は、今日に引き継がれ、今も彦根一会流や石州流井伊大老派が活発な活動を展開している。彦根には、千家など町衆の茶の湯とともに、大名茶の系譜を引く茶の湯文化が今日まで息づいている。

「能楽」

彦根藩の能楽も、井伊家歴代当主の嗜好に沿って広く普及した。初代直政が家康を、2代直孝が家綱を、それぞれ自邸に招いて能を催したことが知られるが、4代直興は55人の能役者を召し抱えた記録が残っている。10代直幸は、喜多流宗家と師弟関係を結び、自ら能を舞った藩主として知られる。11代の直中は、寛政12年(1800年)に表御殿に能舞台を建立、そして既述のように退隠に際して、槻御殿にも能舞台を建立した。直中の代に能役者の定雇い体制が確立したと考えられ、能面や能装束の収集も行われた。直中と喜多流宗家古能との関係は深く、古能は彦根に足を運んでいる。12代直亮の頃に江戸上屋敷にも能舞台が建立され、13代の直弼は能や狂言を自ら創作している。このような歴代藩主の能楽への傾倒は、多くの能役者を抱えるとともに、能を楽しみ、能に興じる家臣らを生み出した。現在も、表御殿(彦根城博物館)に伝存する能舞台を用いた能狂言の上演には多くの鑑賞者が訪れ、歴史的建造物である能舞台は多くの市民に愛され活用されている。このように、城と城下町を形成する歴史的建造物やまちなみとともに、大名文化の息吹が今も人々の中に継承されている。

「無形民俗文化財」

一方、城下町以外の町々にも、郷土を彩る芸能が多様な形で伝えられている。現在、戦国時代の天文年間(1532年～1555年)に全国的に流行した風流踊りの原形を継承する「小泉町幌踊り」と「小野町太鼓踊り」、江州音頭が流行する以前の江戸時代後期の古風な振り付けを残す「大藪踊り」、女性だけの手踊りで、明治時代によく歌われた座興歌に古老がナスとカボチャのけんかを面白く振付けた「高宮町かぼちゃ踊り」の4件は、特に市指定の無形民俗文化財として伝承されている。



小泉町幌踊り



小野町太鼓踊り



大藪町大藪踊り



高宮町かぼちゃ踊り

「彦根仏壇と湖東焼・高宮布の伝統工芸」

彦根には、彦根仏壇や湖東焼、高宮布などの伝統工芸も盛んであった。彦根仏壇は、中山道高宮宿から彦根城下にいたる彦根道に沿って築かれた七曲がりの町筋に、今も仏壇街として江戸時代以来の歴史的建造物のまちなみの中で仏壇制作の伝統を継承している。

湖東焼は、江戸時代後期に城下の商人絹屋半兵衛によって創始された焼物である。のちに彦根藩に召し上げられて藩窯となり、井伊直弼が藩主の代に黄金時代を迎えた。磁器を主体に「湖東」ブランドとして優品を制作する一方で、大量の日用品も焼造して殖産興業の一翼を担った。

高宮布は、高宮周辺で生産された上質の麻布であり、「高宮上布」とも通称された。江戸時代には将軍や諸大名の贈答品として珍重され、彦根藩の名産の1つであった。

（8）特産品、菓子、料理等

水と緑豊かな自然環境に恵まれた本市には、地元で長く親しまれてきた湖魚料理などの食材や街道沿いで製造販売されていた妙薬などが歴史と伝統の中で人々の生活に息づいている。また、近年では、荒神山の麓で栽培されている「彦根梨」など、新たな特産物が生産されるなど彦根ならではの食材などを通じた文化が発展している。

「近江牛」

寛政年間（1789年～1801年）以降、将軍や諸大名からの求めに応じて彦根藩から牛肉を贈った例が史料により確認できる。食べ方や意識としては、日常生活の中の食べ物ではなく、食べることにより体調がよくなる滋養強壮剤という認識があったことが窺える。



近江牛

「赤玉神教丸」

文化11年（1814年）に描かれた『近江名所図会』の中で、中山道の63番の宿場であった鳥居本宿の様子として赤玉神教丸を販売する有川家の店先の賑わう風景が描かれている。この赤玉神教丸は、腹痛・食あたり・下痢などに効く妙薬で、多賀大社の神の教えによって調合したため、その名があるといい、現在も製造し販売されている。後に、江戸期に建てられた有川家の建造物は、平成24年（2012年）に国の重要文化財に指定された。



重要文化財 有川家住宅



赤玉神教玉

上が江戸時代のもの。滋賀大学経済学部付属資料館寄託。下は現代のもの。

「益寿糖」

益寿糖は、餅米と粟水飴を練り固めた餅に和三盆糖をまぶした餅菓子で、城下の菓子商「糸屋重兵衛」で江戸時代後期から作られていた。幕末には、御城にもしばしば納められており、彦根藩から他家への贈答品として使われたこともある。

町人の間でも知られており、京都からの知り合いを頼って取り寄せられたこともあるという。



益寿糖

「湖魚料理」

鮎、エビ、シジミなどの琵琶湖のさまざまな湖魚類を醤油、飴で煮た佃煮や、豆や大根と一緒に炊くものもある。



湖魚（鮎）

「鮎鮓」

鮎鮓は、日本最古のすしと言われている。鮎にご飯を混ぜて発酵させたなれ鮓で、独特のにおいがある。祭礼で神に捧げられることもあり、琵琶湖の恵みを象徴する食べ物でもある。

彦根藩から幕府へ定期的に献上され、献上物とする基準は、領内の土産物とされていたため、鮎鮓もその当時彦根地域の伝統的な特産物であったことがわかる。



鮎鮓

「彦根梨」

彦根梨は、石寺町の曾根沼干拓地で昭和56年（1981年）から栽培が始まり、付近の農家が荒神山西側の麓の約10.4haの梨園で生産し、地域特産品「彦根梨」として定着している。

幸水 8月中旬～9月上旬。果肉がやわらかく、甘味が強い。

豊水 8月下旬～9月中旬。甘味の中に程よく酸味がある。



彦根梨

彦根りんご

りんごは、『新修彦根市史』によると文化13年（1816年）にりんごの苗木が彦根に来たことを示す記録があるとされている。明治以降も栽培が続くが、昭和5年（1930年）頃衰退し、残ったりんごの木も同30年代には枯れたという。その後、同47年（1972年）に復活が試みられたが成功しなかったようである。平成15年（2003年）に結成された「彦根りんごを復活する会」は、りんごの研究を重ね、西今町などにりんご園をつくり栽培を進めている。

